

暴君 ギュンター・ジークリング

川本多紀夫

登場人物

ギンター(ギンター・フォン・ジークリング)

領邦フェルゼンスドルフの君主(オットー公の長男)

イザベル ギンターの姉(オットー公の長女)

カロリーネ ギンターの妻

ディートリッヒ(エドゥアルト・フォン・ディートリッヒ)

領邦の宰相

オイケン(リヒャルト・フォン・オイケン)

領邦の官房長

ヴィーラント(ヨアヒム・フォン・ヴィーラント)騎士

アルベリッヒ ギンターの侍従(後に侍従長)

クラウス 警護隊士官(ストア学派)

フランツ 警護隊士官(エピキロス学派)

クルト(クルト・フォン・ヴァイスバッハ)老貴族

シュヴァルツ(エルンスト・フォン・シュヴァルツ)領邦議会議長

ヴァルター(ヘルムート・フォン・ヴァルター)警護隊指揮官

アルノルト(ロベルト・フォン・アルノルト)鷹狩りの貴族

ホルスト オイケンの部下

カール ギンターの召使い

マルタ カールの妻

道化

刺客

老人 キリスト教の信者

ミヒャエル 鷹匠

ルーカス 博労の徒弟

パルツェ 運命を司る女神たち

黒い影

貴族議員たち

警護隊の隊員たち

舞台は、中世一五世紀末のドイツ南西部の、仮想のある一領邦フェルゼンスドルフ

第一幕

第一場

あたり全体が薄暗く、ひとところだけが、ぼんやりと明るむところに、運命の女神パルツェの、不気味な三人の黒い影が、座って糸を紡いでいる。しばらくして、糸を紡ぎ、より分け、糸を切るそれぞれの手をとめて、声を合せて陰気な声で歌うように語る。

「今より三年の後の、秋の暮れ。ギョンター・ジークリング」
明かりが次第に暗くなるにつれて、声が遠のきながらも一度、女神たちの中でもっとも声の低い一人が、不気味に語る。

「今より三年の後の、秋の暮れ。ギョンター・ジークリング」
声が消え去ったあと、やがてまわりが、すっかり暗くなる。

第二場

日が暮れる砦の城の、満足に家具らしいものも見当たらない、寒々とした粗末な部屋の中。

イザベルがただ一人。

歩きまわりながら、怒りの調子で何ごとか愚痴っている。

呼び鈴を鳴らす、誰も応えるものがない。

イザベル 荘園の館から引き立てられて、人里離れた荒山の砦の中のみすぼらしい窓も満足にない、薄汚い部屋に閉じ込められようとは。

聞こえてくるのは、野山を吹き抜ける風の音ばかり。

雨風が荒れる夜は、山の奥の方で、不気味な山鳴りが叩くドラムのように、砦の塔のまわりを飛び回って鳴き騒ぐカラスの声は、闇の底から泣き叫ぶ大勢の人の悲鳴のように聞こえる。

（ため息をついて）父上や母上と一緒に、宮殿の中で暮らしたところが懐かしい。

わたしが若くして嫁いだシュテファン様は、少し女たらしのところはあったけれど、陽気で大らかな人たちのお人だった。

それが、あまりにも早くお亡くなりになった。

あのころを思うと、この闇でさえ、ひととき明るむように思える。

それがいまは、黒々とコウモリが飛び交う、まるで洞窟のような部屋のなか。

こんなに寒いというのに、いるのは気の利かない老婆のような女ばかり。

暖炉に火をつけるように呼んでも、いつこうにこようともしない。

（声の調子を変えて）それにしても、憎らしいのは、我慢のならないのは、あの愚か者のヘルマン。

おまえが失敗をしたおかげで、とんだ羽目になってしまった。

（苛立って）あれほど、用心深く、慎重にことを運ぶよう言っておいたのに。

手落ちなどというよりも、あまりにも馬鹿らしい失態だ。

運命の女神パルツェたち、弟に味方したのね。

復讐の女神エリーニュエス、御身は私を兄弟殺しの咎で罰しようとするのね。

でもそれは、まちがっているわ。

行為は、成功しなかったのだから。

それはなかったことと同じ。

それなのに弟には、復讐の思いを遂げさせた。

わたしの、たった一人の子のコンラートと、甥のヘルマンを斬首の刑に処して、わたしにはこのような目にあわせるとは。

それにしても、（立ち止まって）憎らしいのはヘルマンのやつ。

もう少し骨のある者かと思っていたら責められる前に自白をしておった。

あのこずるい女狐めのカロリーネ、弟のギュンターを唆して、よくもわたしをこのような目に会わせたわね。

とつぜん、部屋の外から足音が近づき、武具を付けた三人が案内もこわずに、

無言でいきなり部屋に押し入る。

イザベル （ぎょっと驚いて）おまえたちは何者です。

いきなり、許可もえずに婦人の部屋に押し入るとは。

名を名乗り、用向きを言いなさい。

三人、無言のままイザベルに近づき、捕らえようとする。

イザベル、ソファの反対側にまわり、手で制する。

イザベル このわたしを、誰だと思っているの。

オットー先君の息女。

先君の後を継ぐはずだったいまは亡き、シュテファン様の妻。

おまえたち。

相手にできるとでも思っているの？

三人、無言のまま近づき、イザベルを羽交い締めにして口を塞ぎ、一人が短剣で刺し殺して、部屋から運び去る。

あたりは、何ごともなかったように静まりかえる。

第三場

領邦国家の君主、ギュンター・ジークリングに対する謀殺が失敗した後のある日。

イザベルが殺害されたことは、まだ知られていない。

貴族の館の一室。

貴族1 このところ、ギュンター殿下には宮殿に姿をお見せにならぬな。

貴族2 あの騒動があつてからだ。

貴族3 何しろ、暗殺という殿下にとっては、思いもしなかったことだったろうからな。

貴族4 襲撃に失敗をして、現場で取り押さえられたヘルマン殿が、実行犯であることは

事実だが。

貴族5 ヘルマン殿の白状によればだが、この事件の黒幕は、ほかならぬ実の姉君にあたる、イザベル様ということだ。

貴族1 そのイザベル様は、もつかのところ山の砦のヴィルデ城に幽閉されている。

貴族2 それに、これもヘルマン殿の白状によると、事件は、隣邦のヴィルトベルクからの介入があつたことは確かだ。

ことの直後に、彼の身边から、何人かの不審な者たちが姿を消している。

貴族3 ヘルマン殿と、イザベル様の実子コンラート殿は、ただちに斬首刑に処せられた。

コンラート殿は、早死にされたシュテファン殿と、その妃のイザベル様の一子だ。

貴族4 ヘルマン殿は、亡くなられたシュテファン殿の甥っ子に当たる。

貴族5 また併せて、貴族が二人、エーリッヒ殿とシュッツ殿が処刑された。

連座をしたという疑いをかけられてな。

貴族1 これから先、まだまだいやなことがつづく予感がある。

顔に化粧をした道化が扉を開けて顔を出す。

貴族たち、急に話をやめる。

貴族2 道化、なぜこんなところへ顔を出す？

道化 （ふざけて）ギンター殿下ご用達のお笑いをお城に届けに参ってござるが、殿下はお見えにならぬよう。もしもと思ひましてな。

貴族3 笑いといっしょに嘘八百もな。

道化 八百などと。

とてもそんなには仕入れてござらぬが、特別のやつには綺麗なべを着せて。

貴族4 飾り立てるのか。

道化 そのとおりで。

でも、旦那衆ほどには及びもつきませぬ。

貴族5 口の減らぬやつだ。

道化 子沢山の旦那衆。

早く娘ごには、綺麗なべを着せて、外へやって口減らしをなさりませ。

貴族1 殿下は、こんなところへ顔を出されぬ。

離宮の方へ行くがよろう。

道化 それでは、離宮へと大急ぎで参ろう。

韋駄天走りには、ヘルメス様のサンダルを借りなきやならぬ。

それではごめんなすって。

（聞こえぬように）よちよち歩きの旦那衆。

第四場

ギンターの離宮の一室。

ギンターが独り、険しい顔つきをして、不機嫌なようすで座っている。

ギンターによって、密かにイザベルがいる城塞へ送り込まれた刺客の中の一人が、一礼をして入ってくる。

刺客 殿下、ご報告に上がりました。

ことは無事に終わりました。

ギンター 実行したのは誰だ。

刺客 ハイ、わたくしと、殿下がわたくしとは別に、お命じになった者たち、合せて三人であります。

わたくしども三人とも、互いに顔を知らない者同士でありました。

ギンター どのような具合であったか？

刺客 ハイ、殿下のお指図どおりにおこなって、すべてについて抜かりなく終えてございます。

ギンター わかった。

その方は、もういちど現場に戻って、周辺のようにすに何かの変わりごとがないか、探りを入れるのだ。

手伝った地元の者にはその方から、こっそりと目立たぬように、報酬を渡してくれ。ほかの二人には、それぞれ領国を離れて、どこかの傭兵隊に身をおくように申し付けである。もちろん、しばらくの間だ。

よいか、すべてについて他言はならぬ。

だんまりをとおすのだ。

いつまでも、ことの次第や結末がわからぬようにな。

刺客 ハイ、承知いたしました。

刺客、入ってきた時と同じように、一礼をして引き下がり、部屋から出ていく。

ギンター （刺客が出ていくを見送ってから）お互いに見も知らぬ別々の者たちに命じて、同じ一つの仕事をやらせてみる。

互いに競い合って、われこそは一番のご褒美にあずかろうとして、それでも失敗だけはやらかすまいと、慎重にことを運ぶだろうよ。

徒党を組んで悪さをやらかす心配もあるまい。

一人目の報告が終わったあとで、二人目三人目という具合に、別々に報告させて照らし合わせてみる。

そうすれば、誰がどのようにことを飾り立てるか、誇張するか、何がどれだけ嘘か、事実のほどがどうか、わかっていうもの。

それによって、それぞれに報酬を与える。

椅子から立ち上がって、部屋を歩きながら。

口調を変えて腹立たしく。

それにしても、実の姉に当たる者が、おれの命を狙うとはな。

君主のおれを、亡き者にして、後におのれの言いなりになる、出来損ないの息子のコンラートを後金に据えようとはな。

その上で、愚かしくも隣邦のヴィルトベルクと、同盟を結ぼうとしおった。

やがては、この国を乗っ取られる羽目になろうことも知らずにな。

忌まわしい魔性の女め。

名君と称された父上のもので、心根もまっとうに生きてきたおれの心に、おぞましい猜疑の種を植え付けやがった。

それが芽生えて醜く成長して、人を疑ってやまない陰險な思いと、毒々しい悪意の心が住み着いてしまった。

おれが自分でも腹立たしく思うのは、これらの中に、醜さばかりが目立って、美的な要素がひとつかけらもないことだ。

（間）名君と呼ばれた者を父にもつ、実の姉の仕業だとすると、血を分けたこのおれの身にも、もともとその悪意に満ちた、陰險で激しやすい血が流れているとしてもおかしくはない。

今まで気もつかなかったことが、現われて出た。

（間）だが待てよ。

おれの身にも、この邪悪な血が流れているとしたら、いったい誰のせいだ？
亡くなって久しい、母上か？

いや、母上はむしろ地味で、素直で大人しく父上によく仕える人だった。

そうすると、父上か？

信仰心があつく、修道院を寄進するほどの敬虔さで領民に慕われたものだが、ひよつとしてあれば、自分を偽るための、隠れ蓑ではないのか？

自分でも気づかずに無意識のまま、世間をあざむくための手立てとしてな。

定めてそうであるにちがいない。

偽善者よ、おれの父親などと。

母上といつとき戯れて、おれをこの世に送り出した、ただの器にすぎぬ。

一歩ちがえば、おれはただの、市井の一人のみなしごであったかも知れぬ。

だがな、おれの父親である必要はなかった。

それが「英明な君主」とは、聞いてあきれる。

なお歩きつづけるが、急に立ち止まって、しばらく間を置いたのち、自嘲気味に。

自白をした実行者のヘルマンには、反省をして、恭順を示させたうえで、処刑をしてやった。

最高の皮肉というわけだ。

おれが人を殺すのは、人を恐れるためだ。

猜疑の心がそうさせるのだ。

おれは、人を疑うことを覚えはしたが、憎しみを覚えたことはない。

憎しみのために、殺そうとは思はない。

おれのこの耐えがたい猜疑の思いは、熱く赤く燃え上がることなく、冷たくて青白い炎をあげて燃えあがる。

青白い炎を焚きながら、何とも言えぬ孤独のさびしさを、知ることになってしまった。

ギンターの妃のカロリーネ。

別室で一人、ギンターの部屋のようすを用心深くうかがいながら。

カロリーネ 陰謀が発覚して、荒山の砦のお城に、囚われておいでだったイザベル様に、何ごとか起きたようだわ。

姉上のイザベル様は、自尊心と権勢欲が強く、弟の殿下に、いつも見下したような言動をしておいでだった。

そして、身分の高い親族があることを笠に着て、たいそう私を蔑み憎んでおられたわ。でも、わたしの家系は先祖代々からの貴族階級、お爺様は先の先の君主のルドルフ様に重用されて、次いで、先のオットー様の側近だった方、誇りこそすれ、恥じることもなんかないわ。

わたしに何かの野心でもあると思っているの？

自分の意のままにならぬ殿下が、我慢ならなくて亡き者にしようとしたのね。

殿下は妻のわたしにも、意を配ってくださいださらないけれど、わたしの生涯は、さるお方にすべてをおまかせしているわ。

（十字を切りながら）すべては、そのお方の思し召しのままに。

第五場

ふたたび離宮の一室。

ギンター、馬上試合の手入れをしている。

誰が訪ねてきたかを、知っているようすで機嫌よく。

ギンター 戸を叩くのは誰だ。どこの阿呆だ？

道化 わたくしです、わたくしでございまする。

ギンター どこの阿呆かを訊いておる。

道化 （ふざけながら芝居じみた声で）阿呆とは、異なことを。

ギンター ほかに、どんな言いようがある。

阿呆ならば入ってよい。

入れ。

道化、わざとおどおどしたふうに入ってくる。

顔に化粧をして、左側が白色、右側が黒色の衣装を着ている。
体をひねって、わざわざ見せつけるような素振りをする。

ギョンター （冷やかして）着ている物が、みぎひだり、ちぐはぐだな。

道化 これは、真理を象徴しているのです。いわば二律背反。

伝統的な、そして古典的ともいえる演出です。

左が知恵と知性を、右が愚と無知を。大昔のソクラテス的なテーマです。

左側を赤色に変えてみると戦争を、そして右側は死を意味します。

いや戦争も死を意味するとしたら……エエと、平和を表す色はですね、それは……エエと……。

ギョンター いっそのこと、みぎひだりはやめて、前と後をそのようにしたらどうだ。

道化 なかなかの発想に富んだお言葉です。

創造的でさえある。

大いに結構ですが、少しばかり複雑で微妙なところが生じます。

いや、当て付けにとられかねません。

表で服従、裏で背反、面従腹背ということになりかねません。

ギョンター 無理なこじつけや、屁理屈はよせ。

道化は道化らしく、阿呆なダジャレや皮肉を言っておればよい。

胡麻をすったり、お世辞を言うのは、貴族たち年寄りどもがすることだ。

多弁で言葉が明瞭なわりには、意味が不明でわからぬのは、役人どもの言うことだ。

（間をおいて）うむ、貴族たちめ。

おまえたちは、ろくろく働きもせず、ただただ先祖からの財産や録を食むだけで、何かにつけて寄り合っては、駄弁を弄したり愚痴ったり、挙句の果てにお互い同士、散々にケチをつけ合うのが落ちだ。

道化 ケチは難癖、難癖をつけ合っているのは、貴族議員たち。

馬上試合の騎士たちは、傷をつけ合い、商人どもは嘘をつき合い、町衆たちは、お互いに貸し借りの付けつけ合います。

ギョンター 口の減らぬやつだ。

道化 減らぬのは、母ちゃんのポンポコお腹、いつも孕んでおります。

お陰で減るのは、亭主の財布の中ばかり。

ギョンター つまらぬダジャレだ。ほかに何かないのか。

道化 （引き取って）ございますとも、ございますとも。

先だって、わたしがお城へくる途中、道端のスモモの木に登って実を齧っておるときに、うっかり取り落としたスモモが、ちょうど下を通りかかったヤツの頭に当たりましてな。ヤツが上を向いて睨みつけるものですから、わたしも「気をつけろ、上を向いて歩け」と言っちゃいますと、ヤツめが私のツラを下から見上げて「おまえの上さまは、よっぽどの変わり者だな、おまえのようなアホな猿を飼いおって」とぬかすじゃありませんか。

したたか者ですな。何しろ、わたしは木の上にいるのですからな。

ヤツめは、なかなかのしたたか者ですな？ 剛の者ですな？

ギウンター （にやにやしながら） もうよいわ。

思い出した用事がある。下がれ。

第六場

隣室に控える侍従を呼び出すために、ギウンター、呼び鈴を鳴らす。

現れた侍従のアルベリツヒは、痩せぎすで背が低く、一目では、若いのか年寄りか、判断がつきかねるほどだがまだ若い。

狷介で小ずるそうな眼つきをしているが、胸の奥の隠れたところでは、どうしようもない劣等感を秘めているのは確かだ。

二人さっそく、密談をはじめ。

アルベリツヒ お呼びのようなので、早速あがりました。

ギウンター ああ、おれの近くに寄って座れ。

アルベリツヒ （近くに椅子を引き寄せて座る）

ギウンター 家僕から、その方が、おれの身近に仕える侍従になれたのも、ひとえにその方の才覚によるものだろう。

アルベリツヒ とんでもございません。

ひとえに殿下のお引き立てによるものでございます。

このように、殿下のお側でお仕えすることは身に余ること、まことにありがたいことでございます。

ギウンター ところでその方、カール・レオンハルトを覚えておろうな？

アルベリツヒ はい、覚えております。

先君のオットー様が、お亡くなりになった際に、自ら宰相の身を引かれて、隠居なされました。

ギウンター そうだ。

（何か意味ありげに相手を見つめながら）おれはどういうわけか、その後の彼のこと
が気にかかってな。

アルベリッヒ （まごついていたが、やがて気を取り直したふうで）はあ。お言葉を聞き
まして、初めてわたくしもそのように思えて参りました。
仰せのとおり、たいそう気にかかることでございます。

ギンター おれが知るところでは、何やら腑抜けのようになって、あるいはそうではな
くて、ほかに何かの考えがあつてのことかは知らぬが、ひよつとして妾宅のところへ
か、これもよくわからぬが、日が暮れかかると一人でふらふらと、毎日のように外へ
出かけるらしい。

アルベリッヒ いつかわたくしも、そのような噂を耳にしたことがございます。
飲み屋の方に姿が見えないとなると、仰せのとおり、きっと妾宅のところでございま
しょう。

ギンター ところがある日の暮れ方、遠からぬところの警護隊の厩舎からとつぜん、綱
から放れた暴れ馬が往来に飛び出したかと思うと、間もなく彼の悲鳴が聞こえる。

馬はそのまま走り去って、それから辺りは静かになり、またもとどおりになって物音
ひとつだにしない。

（顔を覗き込みながら、声をひそめて）どうだ？ ここのところ、その方にはわかる
な？

アルベリッヒ （しばらく怖じ気づいて黙っていたものの、またもや気を取り直して）は
い、わかりますとも。

ようやくわかりましてございます。

厩舎から暴れ馬が往来に飛び出すことは、よくあることでございます。

ギンター そうだな。それでは続きは、後日また話しにきてくれ。
下がってよいぞ。

アルベリッヒ （深々と、気おくれしたふうで、一礼をして引き下がる）

ギンター、アルベリッヒが退室したあと、独り言。

ギンター アルベリッヒよ、その方は伝説のニーベルングのように、狡猾で抜け目のな
いやつのようなだが、やつがジークフリートにしたように、素直におれに仕えるのだぞ。
よいか、このおれに、二心を持つてはならぬぞ。

第七場

貴族の館の廊下。

城塞のイザベルに異変があつてから、何日か経過している。

貴族1 山の砦のヴィルデ城に、幽閉されたイザベル様の姿を近ごろ見かけぬという噂だ。

貴族2 地元の者の話では、城塞にはいつものほどの警護兵の姿が見当たらず、城塞は何となく静まり返っているという。

貴族3 いつかの夜に三つの黒い影が、城からからひそかに立ち去ったという。

貴族4 詳しいことはわからないのか？

貴族5 これ以上の詳しいことを、地元の者たちは黙り込んで、話したがない。

貴族1 あの道化を抱き込んで、探りを入れてみたらどうだ？

貴族2 ダメだ。やつは、口先だけで生きている男だ。

心のうちなどわかるものか。

貴族3 それに、やつが何を知っているというのだ？

貴族4 無駄なかかわりはよせ。

貴族館の議員たち、声をひそめて。

貴族5 いずれにしても、イザベル様に、何かがあった。

貴族1 これで、ひと区切りついたってわけか。

貴族2 いや、まだあるかも知れない。油断はならぬ。

第八場

数日の後。

馬に蹴られたらしく、腹部に大けがをした、レオンハルトの遺体が道端で見られる。

宮殿の君主の間、カロリーネが同席している。

カロリーネ 先君のお父様の時の宰相のカール・レオンハルト様が、街道で暴れ馬に蹴られてお亡くなりになった。

宰相を退かれた後の隠居の身の方が、このたび思いもよらぬことで、お亡くなりになるとは。

よほど、運命の女神の、不興を買ったものかしか言いようがないわ。

それとも、仕組まれた誰かの悪意によるものかしら。

ギンター その場にいるか、いないかで、その者の運命が分かれることがある。

もちろん、その場に居合わせない方が、よいにきまっている。

運命の女神たちも、手の出しようがないからな。

行動をするか、しないか、もちろん行動しないことがよいのは、わかり切っている。

道を歩いているだけで、思いもしない、不慮の事故に遭うことだってあるのだ。

ゆえに、出かけない方がよいのだ。

（間をおいて、何やら意味ありげに）その場に居合わせて、あらぬ疑いをかけられるよりも、そのようなところにいない方がよいにきまっている。

カロリーネ、何かに怖気立つような表情を見せながら、無言で部屋から立ち去る。

二人のあいだに冷えきった雰囲気がただよう。

ギンター、部屋に一人のこりながら、何やら呟いているうちに次第に激昂する。

おれは、天から呪われた選民だ。

英明君主といわれた者のもとに生まれた、いわば鬼子だ。

この榮譽に臆することなく、堂々と猜疑の鬼たる悪党であれ。

猜疑を持つことに、中庸中途半端などということはない。

ロジックに反する。

疑い出したらキリがない、というのが決まり文句だ。

小心者らしく、天邪鬼のようにひねくれておれ。

選民である鬼子という、何とも奇妙な取り合わせなことだ。

こうして、悪鬼のような心を秘めて、そとづらは陽気な笑顔をもって、暴虐に立ち振る舞うのだ。

おれを暗殺しようとやつらには、反省が間違いないことを確かめたうえで、死刑を執行してやった。

まことに効果的な手法であった。

暴君といわれる者のほとんどは、小心者か、怖がりかのどちらかだ。

おそらく、小心者のゆえに怖がるのだろう。

だがな、ほんとうの暴君は、そのような者ではないぞ。

大胆に無慈悲に、人の意見などはいっさい意に介さずに、自分の思うがままに振る舞うことだ。

残忍さを超えてこそ、得られる境地をめざすのだ。

そしてそれを、美学になるまでもってゆくのだ。

それが非凡というものだ。
生まれ落ちて、すぐに洗礼を受けたとはいえ、おれはその前に、まぎれもなきゲルマン人だ。

古代のゲルマン民族の神々、主神ヴォータンを祀って何が悪い。
伝説の騎士、ジークフリートの勇姿を思い見よ。

そして何ごとにおいても、慎重であるよりも、果敢に攻めることが大切だ。
おれは、馬上試合で相手と闘うことでそのことを学んだ。

第九場

離宮の一室に道化がきている。

ギユンター、道化を相手になぜか機嫌がよい。

馬上試合用の鎧の手入れに余念がない

ギユンター 今日はまだ何の演技だ？

（からかって）悲しみをじっと耐えている、詩人の真似でもしているつもりか？

道化 詩人と道化は紙一重、いや、裏表といってもいいくらいです。

ともに、理想的な高い境地を目指しながら、実現できないでいるのです。

（苦しそうな仕草をして）そのためにこのように、悶えながらじっと苦しみに耐えて、
悩める者の目付きをしているわけでありませう。

ギユンター 下手な芝居はよせ。

もう少し、ましな人間の演技ができないのか。

道化 人間がお粗末なら、比例して神さまのでき具合も悪くなります。

（天を仰いで）まことに神さまには、不敬失礼なことではございますが、何分にも
世間の者がそのように申しておりますのでござりまするので。

ギユンター おれは、そのでき具合の悪い神さまにも及ばぬゆえに、頼ってくる者がいた
としても救ってやれぬナ。

道化 ごもったもなことで。

いやその、何と申し上げるとよろしいのやら……。

ギユンター もうよい、その皮肉や、当てこすりめいたことを言うのをやめて、いっそう
のこと、その化粧を落として、まっとうな者の顔を見せてみてはどうだ？

いつぞやの、スモモの木に登っていたときの、猿のようなツラをな。

道化 ご勘弁ください。

そのようなことをすれば、本当のことが言えなくなります。

それに、化粧を落したり、衣装を脱いだりしたら、わたしはただの凡人です。わたしは道化であればこそ、こうして殿下のお側でお仕えできるのです。

ギンター もっとも、化粧を落として、もとの凡人に戻ったつもりが、もはやすっかり道化根性が身についてしまって、どんなに嫌に思えても、日ごろの一人の時には、自分に嘘をついたり、おどけてみたり、泣いてみたり、変な仕草で歩いてみたりといった具合に、一目見て気が狂ったように、ならないとも限らない。

道化 （わざと大仰なようすで） 思ってみただけで、そら恐ろしいことでございます。

そんなに人を脅かさないでください。

しかし、なかなか文学的でもある。

（氣を変えたふうに） でも、それが自然であれば、それでもいいかもしれません。

何しろ悩まなくていいでしょうから。

ギンター （真面目に） おれは一介の書生でもよかったのだが、皮肉なことに一国の領邦の君主だ。

道化 （間をおいて） じつは殿下、そのご尊顔にお目にかけてたき人物を、部屋の外に待たせておるのでございます。

なに、人物と申しましても、ほんのわたしの知り合いの、取るに足らぬ者でござりまして、信心深い年老いた、キリスト教徒めにござります。

ギンター そうか、構わぬからここへ通せ。

道化に案内されて、キリスト教徒の老人、ギンターに向かって、恭しく腰をかがめて一礼をして部屋に入る。

ギンター、斜め横の椅子を指して老人を座らせる。

道化は、老人のそばに立ったままの姿勢。

ギンター （老人を横目に見ながら） 道化の話では、その方は信心深いキリスト教徒と
いうことだが、なぜ、そのように熱心にキリスト教を信じるのか？

老人 （正直に） はい、これまでにいろいろ悲しい目、辛い目に会いまして、そのうえこのように年老いてしまいましたので、キリストさまにおすがりするのでございます。
死ぬまえには、告解をして罪を神さまにお赦しをいただきたく思います。

ギンター、顔をまともに向ける。以後もその姿勢をつづける。

ギンター 死ねばどうなるかな？

老人 はい、霊は黄泉にとどまりますが、世の終わりのときに、キリストさまが再臨なされまして、霊は審判を受けて、正しき者は神の国の永遠の命を、悪しき者には永遠の

刑罰が定められます。

ギウンター 天国はあるのか？

老人 はい、この空高く（天を仰ぎ見る仕草をして）すべてを、見そなわすエホバさまがおられ、キリストさまが右側に座っておられます。

ギウンター 地獄はあるな？

老人 はい、この地の下にあつて、永遠の刑罰を受けるところでございます。

ギウンター われわれはそれぞれ、古来から、ヴォータンやユピテルをはじめ、ゲルマンやギリシャ・ローマに由来するいろいろの神々を持つが、その方たちの神は、なぜ一人なのか？

老人 はい、真実が一つであるように、エホバの神さまお一人なのでございます。

ギウンター それは、言葉として、わからぬではないが、（道化に目配せをして）何やら道化仕込みの詭弁のように聞こえるぞ。

道化 （ズッコケる）

ギウンター キリストと申す者も神なのか？

老人 はい、神さまでございます。

ギウンター それでは、神が二人いることになろうが。

老人 イエス・キリストさまは、エホバ神さまのおん子でございます。

そしてエホバ神そのものでもあらせられます。

ギウンター よくわからんな。

して、そのキリストは十字架にはりつけにされて死んだのだな。

いったい、神は死ぬものなのか？

老人 はい、十字架にかけられて、お亡くなりになったあと、三日目に甦られたのでございます。

そして、使徒たちの前にお姿をお見せになったのちに、昇天なされたのでございます。

ギウンター わからんな。

キリストは、いなくてもよかったのではないのか？

老人 いえ、キリストさまのお取り成しがなければ、罪深い者たちは救われないのでございます。

ギウンター それにしても、なぜ十字架にかけられなければならなかったのだ？

老人 お取り成しが、成就するためでございます。

ひとは、自分の犯した罪をつぐない切れるものではございません。

それで、罪深い者たちの、身代わりに成られたのございます。

ギウンター いやいよもって、よくわからんな、お取り成しなどと。

徳のある、やさしく憐れみ深い一人の男が、他人の身代わりにしろ、冤罪にしろ、はりつけになって死んだ。

それをまわりの者たちが、惜しんで嘆き悲しむ。

よくある話だ。それでよいではないか。

三日目に甦ったというが、使徒たちは、キリストという者の霊を見たにすぎぬのではないか？

老人 甦られたキリストさまは、エマオの村へゆく道で、二人の弟子にお会いになられ、そののちにもエルサレムで、弟子たち全員の前に立ってお話しになりました。

また、ローマ市民であったパウロさまは、ダマスカスへキリスト教徒を召し捕りに向かう途中、キリストさまのお声を聞いて、回心をなされました。

ギンター ギリシャの地方の言い伝えでは、霊は供えられた生贄の血を啜ったのち、話しはじめるという。

その方は、審判を受けたのちに天国へゆけると思うか？

老人 それを願っておりますが、どのようなことになるかわかりませぬ。

エホバさまの思し召し次第でございます。

ギンター その方はいま、どこに住んで、どのような暮らしをしておるのか？

老人 はい、修道院長さまのお情けで、修道院の菜園の片隅の小屋に住まわせていただき、ときおり菜園の世話を手伝いながら暮らしております。

ギンター その修道院から、ちかぢか修道僧たちを追い出して、いま一つ新しい離宮に造り替えるつもりだ。

して、どうだな？ もしその方が、いにしえからのゲルマンの神、ヴオータンに仕えるなら、菜園の片隅などでなく、どこかに住みよい館を与えてやるがどうだ？

老人 私は、この老いの身をエホバさまに捧げております。

すべては、エホバさまの思し召しのままでございます。

ギンター （しばらくしてから）そうか、もうこの辺で下がるがよい。

老人、入ってきたときと同じように、ギンターに向かって恭しく一礼をして部屋から立ち去る。

道化 （ギンターに近寄って）あの者をいかなさるおつもりです？

ギンター 誰も告発者がおらぬ案件で、処罰するわけにもゆくまい。

そちとても、そのつもりで連れてきたのであろうが？

道化 仰せのとおりです。

ギンター 宮殿の外まで送ってやるがよい。

道化、老人に追いつき、宮殿の外へ出る。

老人 （離宮の外へ出たところで、深々と礼をして、道化に対して十字を切る）
道化 おい爺さん、ご老人。

おまえたちにとって、異教徒であるかも知れぬこのおれのために、なぜ祈ったりするのだ？

老人 行く末、大きな苦悩を背負われる、おまえさまのために、失礼ながらお祈りをしましたのです。

道化 この先、このおれに大きな苦悩とな？

老人 はい。

殿下のためにも、して差し上げたかっただのですが、そのようなことをすれば、かえってご機嫌を損なうことになりましょう。

（最後に十字を切って）カロリーネ様に、神のご加護を。

—幕—

第二幕

第一場

宮殿の貴族の控えの間、貴族たち。

貴族1 近ごろ急に殿下は、宮殿に滞在なさらぬようになった。

貴族2 われわれ貴族の議会にも顔をお見せにならぬ。

貴族3 領邦議会は、英明な先君のオットー公が生前に提唱なされて成ったものだ。

審議する案件によっては議会の承認が必要だ。

審議の結果を上奏しようにも、殿下がおられぬのでは話にならない。

貴族4 行政を任された官僚たちも困惑しているという。

貴族5 下手をすると、官僚たちが、勝手気ままな振る舞いをしないとは限るまい。

貴族1 国のまつりごとを差し置いて、狩猟と馬上試合に夢中とはな。

連邦官房長の、リヒャルト・オイケンが顔を出す。

オイケン そんなにみんなでたむろして、今日はまた何の井戸端会議だ？

貴族2 井戸端会議などと、何を言う。

大事なまつりごとの相談だ。

貴族3 何しろギンター殿下が、なかなか顔をお見せにならぬのでな。

オイケン だからといって無意味にたむろして、油を売っていても仕方がなからう。

みんなで協議した事案は官僚を通じて殿に上奏するのだ。

そして否応なしに承認をうることだな。

貴族4 そういう貴殿も、領邦議会の一員であること忘れないでもらいたいものだ。

貴族5 それに、貴殿の責務である宰相や殿下への助言はどうなっている？

隣邦との関係は、どのような具合だ？

オイケン 四方を隣邦に囲まれている以上、絶えざる警戒が必要だ。

警護隊と貴族や家士たちで国を守るが、それよりも、むしろ隣邦との交流と交易を目的とした、経済的な戦略ともいうべきものを、提案してもらいたいものだ。

オイケンが立ち去ったあと。

貴族1 まるで財務官のように、経済のことを口にしたな。

貴族2 官房長ならいまこそ、その職責からして、殿下に物申すべきところを、いっこうにそのような様子がうかがえないのは、どういうわけだ？

貴族3 そのくせ、まるで君主に成り替わったような話しぶりだ。

貴族4 思い上がっているようだ。

貴族5 それにしても、殿下が議会に顔を出されぬために、議会の開きようがない。困ったことだ。

貴族1 議場であれば、オイケン卿にそうやすやすと話させぬものを。

第二場

離宮の君主の一室。

イタリアから帰国したばかりの、警護隊の士官のクラウドとフランクが、敬礼して入る。

椅子の近くに、馬上試合につける武具が一式置いてある。

ギンター 二人ともよくきてくれた。

（クラウスに向かって）きみとは旧知の仲だ。

クラウス （恭しくうなづく）

ギウンター （フランツに向かって）きみとは初対面だが（クラウスの方へ顔を向けて）

彼の友人ということで、きてもらった。

遊学のイタリアから、帰ってきたばかりだというが？

クラウス はい、先君のオットー公に遊学を願い出て、先方に連絡を取っていただき、おかげさまでボローニャ大学で、二年間の聴講をゆるされました。

ギウンター イタリア戦争が始まろうとするさなかに、遊学とはな。

しかし、いずれは官職に身を置くことになる有能なきみたちだ。

いろいろな知識を身に付けるのもよからう。

しかし、ストア学派の学問を学んできたと聞いているが、また随分と昔のものを学んできたものだな。

クラウス はい、古拙な学説ほど、真理がより明確に提示されていると思ったからです。

ギウンター （冷やかすように）そんなものかな。

クラウス （引き取って）先君のオットー公は、学問が好きなお方であらせられました。

ギウンター （制する素振りで）早速だがそのストア学派が口にする、ロゴスとかいうものは、そもそも何だ？

クラウス ロゴスは神であって、世界全体に秩序をもたらすものとして、宇宙の中にも人の中にも、いたるところに遍在しております。

ギウンター おれの中にもか？

クラウス もちろんです。

世界の中の一部である人間は、誰でも本来的にロゴスを持って生まれております。

このロゴスがもたらす秩序を認識し、正しく理解することで、自己の存在が確かなものとなります。

ギウンター そんなものを認識しなくても、おれは確かに存在しているがなア。

クラウス この原理を会得して、はじめて自己の完成が成るのです。

ギウンター （からかいながら）自己の完成が成って、自我が潰れるのだな？

クラウス 自己と自我は同一のものです。

ギウンター よいではないか、完成がすなわち破壊。

なかなか示唆に富んだ言葉だ。

秩序を保つには、情欲があってはならぬな？

クラウス 情欲は、他の恐怖や苦悩とともに、パトスすなわち理性の病的状態を意味します。そのような状態に陥らないことが大切です。

ギウンター （フランツに向かって）彼は情欲を否定するわけだな。

もちろん反対だな、エピキュロス派とかいう快樂主義者のきみはな。

フランチ わたくしどもが信条とするのは、世間で言われているような、情欲や放埒に身を任せるようなことはありません。

むしろそれらから遠ざかることを意味します。

ギンター そうかね。そんなにきばらずに、本能のなすがままに、むしろ情欲や放埒に身をゆだねることが快樂というものだ。

フランチ 人が飢えるとする、喉が渇くとする、それで一切れのパンを食べ、コップ一杯の水を飲んで心身ともに癒される。

飢えや渇きが除かれると、心身は安定して静かな状態を示します。

人がこれ以上を求めなければ、いたずらに心を煩わされることもなくなる。

そのような心の境地を楽しむのです。

むしろストア学派と同じく、禁欲主義ともいえるものです。

ギンター クラウスの言うロゴスなどはないのか？

フランチ ありません。神は完全で不変な、一種の摂理のようなものとして存在しますが、直接われわれ人間に関わることはないのです。

ギンター うむ、神の無関心か。

それでは、どのような悪さをして、ふざけて遊んでも、神のお叱りがないわけだ。お陰で、ちよつとしたアイデアが生まれそうだ。

それにしても、禁欲派と享楽派とは、この上ない取り合わせというものだ。

これからも折々にきて、面白い話を聞かせてもらいたいものだ。

ギンターと別れて、部屋から退室したあとの道すがら。

フランチ 殿下は、馬上試合に夢中だと聞くが、強いのだろうか？

クラウス 長槍のわざは普通だが、剣を持たせると強いというか、やりにくいと聞いている。

変則やルール違反を誰も咎める者はいないからな。

フランチ 誰も殿下と、練習試合をやりたいがる者はいないだろうな。

クラウス いるわけがない。

フランチ 馬上試合はともかく、国政を顧みないのは問題だ。

クラウス 議会にも、ほとんど顔を出さないらしい。

第三場

しばらく経った後の日、貴族館の一室。

それぞれ一様に、声高に話し合っている。

貴族1 領邦の東方のフクスハイムが、隣邦のヴィルトベルクから侵攻を受けたとの知らせだ。

貴族2 急ぎよ、城門から離れて館を構える騎士、ヨアヒム・ヴィーラント殿が宮廷に呼び寄せられた。

さつそく議會を招集して、議員たちの意見を聞くべきだ。

貴族3 どのような対策をとればよい？

貴族4 急ぎ傭兵を募集して、大軍を編成して派遣するのだ。

貴族5 それには時間がかかりすぎる。

貴族1 ではどうする？

貴族2 いま、宮廷で臨時会合を開いて、協議中だ。

貴族3 おっつけ結果は、われわれのところへ知らされるだろう。

貴族4 われわれとしては、待つ他はなからう。

第四場

宮殿の宰相の間。

宰相のデイトリツヒをはじめ、一同が集まっている。

相変わらず、ギウンターの顔は見えない。

デイトリツヒ 貴殿たちには、緊急に集まっていた。

(ヴィーラントに向かって) 騎士ヴィーラント殿には、すでに聞き及びでもござりましようが、急ぎ遠方から駆けつけていただいた。

(頭を下げながら) お礼を申し上げます。

ヴィーラント (武人らしい返礼をして、無言で応える)

デイトリツヒ 近々の情報では、敵勢はわが領邦の東南の、フクスハイムの森林地方面から侵入してきている。

推定される規模はおよそ500程度、うまく運べば十分に撃退可能だ。

ご承知のとおり、わが国は常備軍を持たない。

傭兵を集めるには時間がかかりすぎる。

シュヴァルツ それで、どうするつもりです？

ヴィーラント とりあえず、わたしの配下の者たちと警護隊で騎馬隊を編成する。

加えて銃をもつ歩兵が必要だ。

シュヴァルツ 貴族と、その家士たちに招集をかける。
ヴァルター わたしの隊に加えて、住民と農民からも参集が必要だ。

それに併せて、わが領邦に向かって、大きな岬のように突き出た形の相手の領土を取り囲むように、別働隊を布陣してはいかがですか。
相手を牽制するつもりでな。

デイトリッヒ 相手の領邦の国力はおおかたわかっているが、隣邦は一国だけではない。
四方が隣邦で取り囲まれている。

今後は、外交手段についての方策が必要だ。

ヴィーラント 戦術は、今や長槍を持つ騎馬戦から、銃を持つ歩兵が主力になってきている。このままでは、わたしのもつ財力でもう間に合わない。

デイトリッヒ 何とかして国の財力の強化を図らねばならぬが、財務官にはよりいっそう努力してもらわねばならぬな。

なお会議がつづく最中に、オイケンの部下のホルストが、農民が騒動を起こしたとの知らせもたらず。

ホルスト ヴィーゼ村の農民たちが騒いでおります。

ヴィーゼ村以外に、フューゲル村とフルス村が同調して、段々と騒ぎが大きくなりつつあります。

オイケン 騒動の理由はいったい何なんだ？

ホルスト いまのところ、はつきりしませんが、農民の中にはしきりにギョントー殿下のお名前を叫ぶ者いるようです。

このまま放っておくと、そのうち領内全体に、騒動が広がりそうな勢いを見せております。

デイトリッヒ まずいな、このままでは大がかりな一揆になりかねないぞ。

一揆というものは、領邦の国内問題とはいえ、外国との戦争よりもたちが悪い。

シュヴァルツ このところの天候不順、豪雨の後の干ばつで、小麦などの作物の不作が原因かも知れない。

オイケン それにしても、隣邦からの侵攻と騒動が、同時に起こるとはな。

ひよっとすると、隣邦が介入しているかも知れぬ。

間諜がこっそりと忍び込んで、背後から農民たちを煽動しているかも知れない。

ヴァルター 大いにありそうなことだ。

デイトリッヒ いずれにしても、こちらに対しても急ぎ対処せねばならぬな。

オイケン なるべくなら、武力行使はすべきではない。

会議のこの場合は、わたしの代わりはホルストに任せるとして、わたしがそれぞれの村

の代官と、修道院長と司祭たちと一緒に、村の長たちを説き伏せましょう。
警護は代官の手の者で足りるだろう。
わたしは、急ぎこれから、離宮のギュンター殿下に知らせに参ります。

オイケンの他は、この後も協議はなおつづける。

第五場

離宮の部屋。オイケンがあわただしく入ってくる。

ギュンター、何かの気配を察したように、目配せをして、部屋にいたアルベリッヒを下がらせる。

アルベリッヒ、隣室のドアのそばで聞き耳を立てる。

オイケン 急ぎ、お知らせに上がりました。

隣邦のヴィルトベルクからの侵攻と、農民の騒動が同時に起こりました。
ことは重大です。対策を急がねばなりません。

侵攻に対しては、宰相ディートリッヒ閣下のもとに協議を行い、騎士ヴィーラント殿の手勢と、警備隊と貴族たちとその家士、住民たちもおも含めた軍勢で、対処することになりました。

いっぽう、農民騒動は一揆に発展すれば、わが領内の治安に直接かわりのあることになります。

農民たちの中には非難をして、しきりに殿下のお名前を叫ぶ者もいるようです。

ギュンター （少し狼狽えて） どうすればよいと思うか？

オイケン ほかの村々に波及しないうちに、迅速にことを収めねばなりません。

この種の事態はいったんほかに波及すれば、次から次へと広がって、手に負えなくなります。殿下の立場はたちまち危うくなります。

ギュンター （明らかに動揺して） だからどうすればよい？

オイケン 先君が、しばしば村々に出向かれたように、殿下が直接現地にゆかれて、親しく顔をお見せになるのが一番かと思えます。

しかし、今はいきなりというわけにも参りますまい。

ギュンター もちろんだ。

そちが言うように、ほかへ広がらぬうちに手を打たねばならぬ。

何かよい手立てはないか？

オイケン このたびの、宮廷での協議は、わたくしの代わりに部下のホルストに任せて、

わたくしが村の代官と、修道院長と司祭たちと一緒に、村の長たちを説き伏せに参ります。

ギユンター それでうまく収まるかな。

オイケン 決して武力行使はせずに、騒動にいたったいきさつを見極めて、適切な対処を取ることが肝要です。

議会で、議論などをしている時間がありません。

迅速にことを運ばねばなりません。

ギユンター 迅速に首謀者を見つけ出して処罰するのだ。

加えて、ほかに誰でもよい、農民の何人かを処刑するのだ。

見せしめのためにな。

ことが収まってからでもよい。いや、その方がむしろ効果的だ。

オイケン わたくしは反対です。

そのようなことをすると、逆効果をもたらします。

反省する時間を与えて、恭順させることです。

これからは、以前に先君がなされたように、普段から殿下みずから農村に出向いて、

親しくご自分の顔を、農民たちあわせることです。

馬上試合の鎧と兜を脱いで、騎乗からでも、農民たちに挨拶したり、言葉をかけたり

するのです。

ギユンター （不機嫌に）先君、先君と、まるで親父の亡霊に出会うようだな。

オイケン 時間がありません。

急ぎこれより出立いたします。

ギユンター このたびのことは、そちに任せる。

オイケンが出ていったあと、部屋の中を歩き回りながら。

うむ、ヴィルトベルクからの侵攻と同時に、農民騒動が起こるとはな。

気がかりなことだが、おまけにオイケンの報告を聞いて狼狽えてたりして、まずいところを見られてしまった。

折を見て、何かの手立てを講じねばならぬな。

第六場

宮殿のカロリーネの部屋。

カロリーネ、独り言を言いながら、歩きまわる。

カロリーネ 姉上のことがあってから、殿下は変わってしまったわ。

心がすっかり傷ついてしまったようだわ。

人を疑うことが身について、それに横暴な言動が加わった。

人と会うことを嫌がって、近ごろは議会にもめったに出席なさらぬようす。

先だって、貴族議員のお父様の、使いの召使いのエミリーエがこっそりときて、議会での殿下の評判のよくないこと、貴族議員たちが、殿下からあらぬ疑いをかけられないよう、びくびくとしていること、そして念のためによほどのことがない限り、私の方からも連絡などしないようにと、お父様からの伝言だと言って、帰っていったわ。何とかならないものかと思うけれど、ときどきわたしさえも、避けようとする素振りを見せられては、取り付く島もない。

このままでは、わたしたち二人の間も、またこの国のまつりごとについても、よからぬことが起こりそうで、不安に思われてならないわ。
どうかお父様の身に、何ごとも起こらないように。

第七場

数日後、ヴィーラントの働きと、オイケンたちの対応が成功して、隣邦との戦いと農民騒動の双方とも、無事に収まったとの知らせが議員たちにとどく。

貴族1 隣邦ヴィルトベルクとの戦いが、無事に収まったとの知らせだ。

貴族2 農民騒動が一揆までにいたらずに済んだ。

貴族3 農民騒動では、オイケン卿の意向ばかりがまかり通って、議員のわれわれの意見は反映されなかった。

貴族4 オイケン卿の独断ともいえる対応であった。

貴族5 殿下にも困ったものだ。満足に議会が開かれぬままに済んでしまった。

第八場

離宮の一室。

ギュンターとオイケンが対坐して何か話し込んでいる。

ギュンター、鎖帷子の胴着を着けて、その上に長衣をまとっている。

オイケン この度の隣邦との紛争と、農民たちの騒動も、幸いにうまく収まりました。とりわけ、戦いには騎士ヨアヒム・ヴィーラント殿の働きは、まことに見事にであったという他はない。

そこで、考えがあります。

このたびの、農民の騒動は、例年にない長雨と、その後の干ばつによる小麦と、他の農作物の不作が原因しています。

それで、農民たちだけでは、手に余り過ぎる溜池の造成と、橋の架設に加えて、河川の改修工事に取り掛かるのです。

計画の段階から、代官や村の長たちを参加させて、彼らの意見を交えながら、領邦と、農村が一体となって取り組むのです。

貴族たちの宴会やら、馬上試合や鷹狩りに必要な経費を切り詰めて、方々から経費を捻出するのです。

ギウンター 全体に悪くはないが、われわれの一存ではゆくまい。

オイケン どうしてゆかないのです。

ギウンター 議会の賛同が必要だ。

オイケン それがどうしたというのです？

殿下が、議会を招集されて、殿下みずからの発議というかたちで提出すれば、全会一致で承認されること、間違いなしです。

殿下は、オットー先君につづかれるお方。

君主という栄誉を大きくて掲げて、領邦の市民たち、農民たちに対して示して見せるのです。こういう時こそ、貴族たちに決意を示すのです。

貴族の議員たちには、私から陛下の意志を伝えておきます。

オイケンが立ち去ったあと。

陰鬱な口調で。

ギウンター 彼は、おれが親父からもらった、呪われた選民であることを知らない。

それゆえの、おれが持つ懊悩と悲哀を知らないのだ。

教訓や意見というものは、それを垂れている者の中においてのみ、充足しているものだ。他人が聞いて何の役に立つ？

溜池や河川の改修などと。

そんなことよりも、むしろ貴族をはじめ、町人や農民たちが、恐れおののくようなことを、やってみせてやろう。

大して意味もない理由をいろいろと、ありもしない嫌疑を言い立てて、これと思う者に、処罰を与える。

効果的に何人かは、血祭りに上げるのもよい。

それで何人かの者は、すり寄ってきて難を逃れようとしたり、それぞれが勝手に付度をしたりで、ことを進めようとするだろう。

手始めに貴族の中から、一人目の者には、二人目の者に対しての監視を命じてやろう。二人目の者には、三人目の者の監視を、そして三人目の者には、……という具合にな。やがて、互いに監視をし合って、それぞれが疑心暗鬼の不安におちいる。

そうしているうちに、ありもしない告げ口まででっち上げて、おれのところへ持つてくるにちがいない。

それを、うまく利用するのだ。

（意地悪く）それらのことを、あちこちのグループに仕掛けて、彼らのあいだに混沌と恐慌をもたらしてやろう。

さぞかし、恐怖におののきながら、おれを頼ってくるだろう。

さながら、絶えず狼の影におびえる草場の羊の群れが、羊飼いを頼るようにな。

羊たちは、隣で草を食っているもの同士を知っているが、群れの全体がどの方向に進むべきかは知らない。

それを朝な夕なに、草場の方へ、また囲いの中へと導くのが羊飼いの仕事だ。

よく見かける光景ではないか。

羊と同じく、下を向いているばかりの連中に見えているのは、目の先ばかりで、前方の山の姿は見えてはいない。

彼らには、全体を知る必要はない。

そのうえで、彼らには、それぞれ異なる部分、部分の任務を与えるのだ。

全体の究極の目的を知る必要はないのだ。

官僚であろうと、貴族の議員であってもな。

これからは、いっさい議会に顔を出すつもりはない。

その必要はないのだ。

議員たちは、舞台のうしろの方に集まって、いつもの同じ口調で、喋ったり叫んだりしているがよからう。

そのままそっくり、話に聞く、古代のギリシャ悲劇のコロスのようにな。

第三幕

第一場

離宮の一室。ギンターと道化の二人。

ギンター、またも馬上試合用の鎧の下に着る、鎖帷子の胴着を身に着けている。

ギンター そちとの付き合いも大分になるな。

道化 はい、オットー様に、お仕えしておりましたところからです。

ときには、貴族の方のお屋敷でお内儀さまや娘ごに、町人集の寄り合いに、それから招かれて休日の警護隊の、どんちゃん騒ぎのお付き合いなど。

ギンター あちこちで、よくも嘘八百がつけたものだ。

道化 何しろ、それが商売でして。

真実とともに向き合ってみても、面白くとも何ともありません。

ギンター もっともだ。いま、その真実を申したではないか。

道化 これは、参りましたな。

それより、いちど嘘や冗談と向き合ってごらんなさい。

それがいかなる意味を持つか、おわかりになるでしょう。

つまり、それらの裏側を見るのです。

すると真実が見えてくる。

いちどでも、真実を話してごらんなさい。自分でも嘘をついていることが、わかるでしょう。

いちど、冗談を言ってみる。

それが、いかに虚しいかがわかります。

ギンター お世辞を言うのも虚しいな？

道化 もちろんですとも。また一本取られましたな。

いちど詩を作ってごらんなさい。

絵を描いてごらんなさい。

自分が、どれほど下手なことかわかるでしょう。

ギンター 無駄話はこの辺でよすがよい。

それより、何かほかにドキツとするようなネタはないのか。

道化 (さっそく引き取って) わたくしが思っておりしたのは、他ならぬそのことでご

ざいます。実を申しますと、わたしは殿下にも、我が家の山の神にも内緒で、こっそりとヘソクリを貯めているのでございます。

殿下から、ときおり頂戴しますちょこつとしたお鳥目やら、他からのほんの、ちょこつとした実入りから、ほんのちょびつとだけ、つまみ食いをするようにして、それをわたしの筆筒の奥の、さるところへ仕舞っておるのでございます。

ところがある日、家に帰ってみると、普段から無精な山の神に何ごとが起ったのか、珍しく掃除をしたとみえて、部屋の中がキレイにかたづいておるのでございます。

そのうえに、いつもは口うるさい山の神めが、黙ってわたしを見る目つきが、何とも奇妙でして、そのとき、わたしは心の底から思わず、ドキッとしたのでございます、ハイ。

ギウンター （苦笑いをして）下手な作り話はやめろ。

その方に女房があるなどと、聞いたことがないわ。

しかしそうやって、当意即妙に作り話やら、冗談を言っているうちは大丈夫だ。

ところが、おれの前でびくつくようになると、気をつけることだな。

道化 （わざと心配そうに）そんなふうになりましょうか？

ギウンター なんとも限らんな。

（話題を変えるように）それよりも、本当に思っているとおり、正直に言ってみろ。

おれが、いにしえのゲルマン族の英雄ジークフリートを真似て、馬上試合に熱中するのを、狂気じみていると思うであろうな？

道化 （うっかりと）はあ、そのように……。

（慌ててさも困ったように）いや、そのもう……。

勇者ジークフリートは、ニーベルングンの宝を守る竜を退治したり、ブルグント国の王様を手助けして、嫁とりの旅に一緒に出かけたり、自らも美しい姫さまのために、ミンネゼンガーさながらの、さまざまな苦労や困難な冒険をしました。

ギウンター そうだったな。

おれの冒険は、さまざまな強面の騎士たちを相手にした、馬上試合に勝ち抜くことだ。

道化 そして冒険の合間の気休めに、わたくしのような、阿呆を相手にしなさる。

ギウンター そうだな。

表が裏側などと、本当だとか嘘だとか、などとな。

道化 はい、白を黒と、黒を白などと。

部屋を辞してから独り言。

道化 いちど、まともに馬上試合をしてごらんさい。

本当は、相手がどんなに強いかわかるでしょう。

第二場

離宮の一室。

ギウンターと老貴族のクルト・ヴァイスバッハが対座している。

ギウンターを前にして、クルトが何かに怯えるように、おどおどとしている。

ギウンター（クルトを見据えて）その方が呼び出されたことで、身に覚えがあるのかな？

クルト いえ、恐れながらわたくしには何も。

ギウンター 嘘を申すな。

おれの馬上試合にケチをつけおったな？

クルト いえ、わたくしは、決してそのようなことは。

（啞然として）この年寄りが、なぜそのようなことを。

ギウンター 嘘を申すな。証拠があがっている。

ある者からその方と、もう一人の者が、おれの馬上試合を非難したとの報告が上がっている。

クルト このわたくしが、なぜそのようなことを。

それは誰かの讒言でございます。

いったい誰がそのようなことを。

このわたくしに限ってそのようなことを。

ギウンター 黙れ。その方には、もう一人の貴族についての言動を報告するように、申しつけておいたはずだ。

だが、いまだに何の報告もない。

してみると、その方ともう一人とは、グルだな？

クルト 滅相もございません。

ギウンター そのうえその方は、隣の国のある者たちと通じておるな？

その者たちに、わが国のことを、あれこれを知らせておろう。

クルト（必死になって）とんでもございません。

なぜわたくしが、そのようなことを。

かの者について、何もご報告申し上げるようなことは、なかったからでございます。

ギウンター 嘘を申すな。

報告することがなければ、報告のしようがあるうが。

クルト まことにごもつともではございますが、それはあまりにも恐れ多いことと存じましたので……。

ギンター　かの者に、その方の言動をちくいち報告するように、申しつけておいたが、やはり同じように何の報告もない。

おかしいな？

怪しいと思うであらうな？

クルト　（困惑と恐ろしさの表情で、無言のまま）

ギンター　決まった。不敬罪だ。

警護兵！　この者を逮捕して連れ出せ。

第三場

何日か後の、貴族の館の中。

数人の貴族たちが、騒いでいる。

貴族1　クルト殿が処刑された。

貴族2　一本釣りにされた。

貴族3　クルト殿の広大な屋敷は没収されて、たちまちギンター殿下のものになる。

貴族4　以前にも殿下の謀殺計画が発覚したとき、確たる証拠も示されぬまま、二人の貴族が処刑された。

貴族5　陰謀を知りながら、報告をしなかったという曖昧な理由でな。

貴族1　それにしても、先だつての農民たちの騒動の件以来、オイケン卿の羽振りのよさはどうだ。

貴族2　われわれを軽く見て、議會をないがしろにしている。

貴族3　貴族議會は、いみじくも英明な先君のオットー公が提唱されて、近隣の諸邦に先がけて作られた議會制度だ

貴族4　われわれに相談をしないで、殿下に具申するとは。

貴族5　殿下も殿下だ。

貴族1　ああ、われわれは何という君主を持ったことだ。

第四場

離宮の一室。

ギンター、馬上試合用の武具の手入れをしている。

アルベリツヒ、急ぎのふうで入ってくる。

アルベリツヒ 殿下、由々しき情報を得て参りました。

つい先ほど、入ってきたばかりで、まだ確かではありませんが、遅くならないうちに
お知らせに上がりました。

ギユンター 何ごとだ？

アルベリツヒ オイケン殿が、先のレオンハルト殿の件で探りを入れているようです。

オイケン殿の手の者と思われる者が、あちらこちらで根掘り葉掘りして、レオンハルト殿のことを聞き出しているそうです。

ギユンター どこから、その情報をえたか？

アルベリツヒ 何しろ、あちらこちらにわたくしなりに、密偵を持っておりますもので。

（わざと慌てたふうに）いえ、密偵などと、どうしてわたくしのような者に、そのよう
うな大それたことが。

密偵というのは、比喩的な言い回しでございます。

つまり、あちらこちらに、友達を。

たとえば、警護隊に馬をおろす博労の百姓とか、お城に出入りの八百屋だとか、煙突
掃除の若い衆とか、飲み屋のかみさんとかですね。

ギユンター 行きつけの女郎屋の馴染みもあるな？

アルベリツヒ はいはい、ただいま仰せの者たちや、飲み屋のかみさんたちは、警護隊の
連中がもつともご最煩なものでございますから。

ギユンター オイケンは、政務に熱心で、生真面目な人物だ。

いまにして、そのような事にかかわるとは、にわかには信じられぬ話だ。

その方の申すことは本当か？

おれの網には、そのような話はかからぬな。

アルベリツヒ 殿下の前で、いい加減なことを申し上げては、ご機嫌を損なうだけです。

それくらいことは、わたくしもわかっておるつもりでございます。

そこへオイケンが謁見を申し入れてくる。

アルベリツヒ、急ぎ隣室へ引き下がって聞き耳を立てる。

ギユンター とつぜんの来訪だな。

それでこのたびは、何用あつて参ったのだ？

オイケン 先だつての隣邦との紛争は、前にも申し上げましたが、騎士ヴィーラント殿の
卓抜な采配によって無事に収まりました。

それについて殿下は、今後のわが国の防衛と経済と農村の治安を、どのようになさる
おつもりか、お伺いしたいのです。

ギユンター まことにわが騎士、ヨアヒム・ヴィーラントにはご苦勞であつた。彼ほどの武將は、他には一人たりともおるまい。

その方にも、今後とも変わらぬ活躍を願いたいものだ。

オイケン 敢えて申し上げますが、領邦の君主たる者は、絶えず領内の農地や山野を見てまわつて、保全に努めねばなりません。

農地で働く農民たちや、城門内で店を構える商人たちや、辺りを行き来する町人たちのようすをよく観察して、わが国の現状の把握に努めなければなりません。

同じように、殿下には議会になるべく顔を見せて、議員たちを束ねて、議会の運営をはかるべきです。

議会にはかる必要のない事項は、殿下みずから裁断を下されるのは大いに結構。

近隣諸邦とは、今後はなるべく紛争が起らないように、外交手段を用いて友好条約の締結など検討すべき課題があります。

ギユンター 同盟を締結することは、たしか昔に金印勅書で禁じられていたはずだ。

オイケン 何も軍事同盟を、結ぼうというわけではありません。

金印勅書に盛り込まれた趣旨は、当時の有力諸侯たちが互いに同盟を結ぶことで、あまりに力を持ち過ぎないように、神聖ローマ皇帝がおもんばかったことです。

いまから百年近くも前の話で、もはや時代遅れとでもいうべきものです。

軍備については、このたびの戦で、騎士ヴィーラント殿が申されるには、もはや乗馬の騎士同士が戦うのではなく、武器は長槍に変わつて銃を持った歩兵たちの戦いへ、攻城戦には大砲が必要になるとのこと。

近隣の領邦の状況に合わせて、対処が必要です。

ギユンター (オイケンの素振りを見て、イライラしながら) まだあるのか。

オイケン 現在の領邦議会は、先のオットー公が提唱されたもの、言うまでもなく時代は変わりつつあります。

先だつての農民たちの騒動などを思い合わせると、議会は現在の貴族と宗教界に加えて今後は、市民、また場合によつては農民の代表をも加えた、幅広いものにすることをお勧めします。

これまで申し上げたこと、熟考のうえ、よきにはかられますよう。後日、また伺いに上がります。

オイケン、貴族らしくきちんと一礼をして出ていく。

ギユンター (そのあと、腹立たしく) うむ、オイケンめ。

おれを軽く見ておるような、横柄なものの言いようをしおつた。

おれを見下しているような、目つきをしおつた。

第五場

オイケン退室のあと、つづいて隣室からアルベリッヒが顔を出す。

アルベリッヒ　よくも、あれだけ厚かましく喋れたものだ。

殿下、オイケン殿は、議員の貴族たちにも、あのような口の利き方をして、反感を買っていると聞き及びます。

増長が過ぎるというのが、議員たちのあいだの意見のようです。

ギウンター　その方は、議員たちの中にも、友達とやらをもっておるのか。

アルベレツヒ　（薄笑いして）ご想像におまかせいたします。

ギウンター　しかし、農民騒動で、あれの働きがあったのは事実だ。

アルベレツヒ　なに、オイケン殿だけではありますまい。

他に修道院長や代官やのおかげですよ。

それどころか、議員たちは議会も開かれず、自分たちの意見もろくろく聞かなかったといつて憤慨していると聞いております。

ギウンター　（皮肉っぽく）それも、どこやらの友達とやらからの情報か？

アルベリッヒ　（薄笑いして）ご想像におまかせします。

アルベリッヒ、部屋から退室をしたあと。

隣の自分の部屋で。

おれは、かずかずの言葉で悪意の種をまき散らし、噂話を大げさに、まことしやかな嘘を広げてまわるのだ。

まことしやかな嘘は、本当よりも本当らしく聞こえるもの。

大きな嘘より、小さな嘘という諺がある。

大きなホラは誰も信用しないで、小さなホラには誰もが騙されやすいというが、まことしやかな、大きなホラを吹いてやろう。天秤をもった正義の女神は、もっけの幸い、目隠しをしてござる。

これ以上の暗示はあるまい。

何が正義で、何がそうでないか、わかるものか。

そんなものは、状況次第でコロリと変わる。

さながら、今日と明日の天気のようにな。

誰もが嫌がり、疑いだすとキリがないような、しんどいことを、敢えてやらかすのだ。

慎重にな。

こつそりとな。

ギュンター、部屋の中を歩きまわりながら。

ギュンター どうやら議員たちが、オイケンに嫉妬をして反感を持っているのは、確かなようだ。

悪くはないぞ。

むしろ、慶事というべきだ。

それもしごく当たり前のことだ。いっこうに、構わぬことだ。

むしろ、おおいに奨励すべきことだ。

オイケンに対して、やっかみ半分、憎しみ半分。

（間をおいて）だが待てよ、もしもアルベリッヒの言うことが、本当だとしたら？

オイケンが、レオンハルトの件で何かの情報を得たり、万が一、真相を知ったとしたら、これは問題だ。

事が明るみになると、オイケンに対する議員たちの反感が、一気におれへの非難に変わってしまう。

そうならぬうちに、手を打たねばならぬ。

心配ごとが現実のものとならぬうちに。

手遅れとならないうちに。

第六場

警護隊の兵舎の近くの夜の路上。

素性の知れぬ若い女が、クラウドに誘いをかける。

クラウド なぜおれに、なれなれしく言い寄ってくるのだ？

若い女 （黙ったままで、なよなよとした仕草）

クラウド 誰かに頼まれたのだな？

（金を見せて）これをやるから、正直に言ってみないか？

若い女 （いやいやをして首を横に振る）

クラウド （もう一枚、金を出して）これではどうかね？

若い女 （金を受け取る。そのうえで何ごとか囁くように言って、そのまま闇の中へ立ち去る）

クラウド うむ、アルベリッヒか……その背後には……。

以前に、フランスと共に訪問した時の会話のなかで、殿下が、ちょっとしたアイデアが、生まれそうだと言ったが。

それがこれか。

辻君をつかわして、ストア学派、つまり禁欲主義を唱えるおれをたらし込んで、あとで大笑いして楽しもうというわけだな。
何という底意地の悪い、俗悪な根性だ。

第七場

朝のうちの貴族の館の一室。

オイケン殺害の報が入る。

貴族1 オイケン卿が殺された。

貴族2 昨夜の夜中のことだ。

宮殿を辞して、自分の屋敷へ帰る途中で襲われた。

貴族3 警護役の家僕ともども、ほとんど抵抗する暇もなくやられたようだ。

貴族4 刺客は、二手に分かれて放たれている。

オイケン卿の屋敷では、奥方をはじめ家の者たちがみんな殺された。

貴族5 真夜中に、屋敷のある方角から、女たちの悲鳴が聞こえたという。

貴族1 誰が刺客を放ったか、見当は付いている。

貴族2 だがな、いまは黙ってろ。

ギュンターの離宮に通じる道のかたわら。

道化 オイケン卿が殺された。

あのように見識があり、誠実で気骨のある、誰にも代えがたいお方が。
しかも奥方と侍女に加えて、二人の幼いお子たちまでが殺されるとは。

第八場

離宮の一室。

ギュンター、鎖帷子の胴着の上に、緋色のマントをまとっている。

部屋の中を歩きまわりながら。

ギンター 深々と、うつとうしい暗闇が眼前にひろがる。

おれには、永遠の不眠の刑を。

つき添う黒い影には、不死の苦しみの刑を。

(間) だが待てよ、このわざとらしい詠嘆や大言の裏には、いやらしい作意がある。自分自身を、いやらしく捏ね上げるのはよせ。

すなおに横暴をきわめるのだ。

(間) だがおれは、憎しみのために人を殺そうとは思わない。

むしろ、誰かを憎んで、そのことだけで誰かを殺すことができたと思う。

そのことで、鬱屈していた気持ちが晴れるかも知れぬ。

ところが、猜疑というものは、どのような放埒や愉悦をもつてしても、消え去ることはない。

底の知れぬ猜疑と不安の、その果てには、ただただおぞましい寂寥と孤独があるばかりだ。

仕切りの分厚いカーテンの陰からそやつが、不気味な青白い顔をのぞかせる。

(やや昂ぶりながら) いましその醜い顔を突き出せ、竜を退治したジークフリートさながらに、このおれが退治してくれよう。

—幕—

第四幕

第一場

宮殿の一室。

ギンターとカロリーネ、立ったまま向き合う。

話し合う言葉のはしばかり、明らかに二人の関係の冷え切っているありさまが感じられる。

ギンター そちがおれを、軽蔑しておるのはわかっている。
カロリーネ （無言のまま）

ギンター 軽蔑は憎しみよりも、たちが悪い。

おれは、そちがおれを、軽蔑していることを知っている。

その目つきから、口もとから、体からな。

カロリーネ わたしは、あなたを軽蔑しているけれど、憎悪はしておりませぬ。

軽蔑という言葉があまりにも、完全であるゆえに。

ギンター 思っていたとおりだ。

しばらくのあいだ、二人とも沈黙が続いたあと。

カロリーネの方から。

カロリーネ わたしにとって、救いはただ一つ、子どもができなかったこと。

ギンター 二人のあいだで、意見が合ったのはただ一つ、そのことをだけだ。

カロリーネ これから、わたしをどうなさるつもり？

ギンター 姦通の咎で罰する。

カロリーネ その咎は、わたしには当たらないわ、身に覚えのないこと。

それは、あなたが、よく知っているはず。

わたしは、あなたの新しい愛人を知っている。

ギンター おれは、おまえの秘密を知っている。

異端のフス派の仲間のよからぬ連中たちを知っている。

カロリーネ わたしには、自分の心に対して、やましく、恥じることは一つもない。

ギンター それはどうでもよい。

そちを、荒山の砦の城へ送り届ける。

カロリーネ そのうえで、姉上のイザベル様のように……。

ギンター、警護兵をよびだす。

あたかも待機していたように現われた警護兵、カロリーネを連れ去る。
カロリーネ、連れ去られながら。

イエス・キリストさま。

どうか、わたくしから離れないでください。

やさしい聖母さま、どうか私にそのみ手を差し伸べてください。

第二場

新しく侍従長に、取り立てられたアルベリツヒの新しい部屋。
成金趣味の、ごてごてした飾り物が見える。

アルベリツヒ　いろいろと、努力を重ねてきた末に、手に入れた侍従長の役職だ。
粗略にはあつかえぬ。

思いは貴族さながら、出自は賤民と同じくだ。
構うものか。

何よりも、機会を逃さずに蓄財に励むことだ。

地位と蓄財、これ以上の組み合わせはあるまい。

蓄財の幾分かは、殿下にもおすそ分けだ。

何しろ、いまや殿下にも入り用不可欠のしろものだからな。

ぎょうさんのお妾さんや、競技場での接待やら、試合の騎士たちにつかわす袖の下、
といった具合にな。

それで八百長試合がうまく収まる。

ご同慶のいたりだ。

法と正義の女神ユステイティアは、目隠しをしたまま、今やコクリと昼寝のさなか。
おっと、天秤がいささか傾ぎかけてござる。

(少し間をおいて) さて、これから先、何から始めるか、ここが思案のしどころという
もの。

自分を頼め、そして自信を持つのだ。

弱みを見せると、運命に付け込まれる。

しばらく黙りこんであと。

どす黒い悪意よ。

顔を出すな、引っ込んでおれ。

まことしやかな善人面よ、前へ出ろ。

野心から野心へ、人間の本能にしたがうまでだ。

第三場

離宮の一室。

ギウンター、アルベリッヒ、近くによって密談を始める。
アルベリッヒ、少しぞんざいな口調になる。

アルベリッヒ ギウンター殿下、いまこそわが領邦においては、人頭税や住民税、また売上税などの税率を引き上げるべく、検討すべき時ではありませんか？

ギウンター 国庫はそんなに窮乏してはおらぬ。
税制だけは触るな。

アルベリッヒ そうばかりも、言っておられますまい？

もう長いあいだ、百年ものあいだ、税率は据え置いたままです。

そろそろ、税率を上げて、殿下のご威光を示すべき頃合いではありませんか？

「君主ギウンター殿下が、それを望んでおられる」と告げ知らせるのです。

日ごろの馬上試合や鷹狩りの費用に必要ではありませんか？

ギウンター 民衆には、門前の広場や草原で派手な馬上試合を見させて、ガス抜きをさせるのがよい。

アルベリッヒ 仰せのとおり。

民意などは意のままに、でっち上げたり無視したり、どうにでもなるものです。

どうせ彼らは、自分たちと同じレベルのものごとでしか、理解できないのです。

増税がダメなら、教会税のピンハネというのはどうです？

これもダメなら、いまひとつ取って置ききの妙案があります。

ギウンター それは何だ？

アルベリッヒ 近ごろ流行り始めた「免罪符」の販売です。

ギウンター それはローマ教皇の専売ではないか？

アルベリッヒ もちろん「免罪符の発行」は教皇のものでしょうが、「販売」はそうではありませんすまい？

もっぱら、教会のドミニコ会修道僧が担っておりますが、なに、手はあります。

その修道僧たちを抱き込んで、売り上げを誤魔化すんです。

何しろ、何を隠そう、すでに彼ら自身がやっていることですからな。

わたしが間に入って、うまくやります。

信心深い町衆の女房や、農村の女たち、安息日の告解がぎょうさんある、欲深い商人たちを相手に売りつけるんです。

いったん動き出すと、あとはもう勢いのままです。

ギウンター まことに教会というところは、信心深くて善良な臆病な者たちを、嘘とハッタリで脅しつけたうえで、煽ったり、焚きつけたりして、「免罪符」とやらを売りつけて、さんざんに儲けようってわけか。

アルベリッヒ そのとおりで。

しかしわれわれも、その手に乗らないって法はありますまい？
ギンター　そして手数料は、そっくりそのままその方の懐へか。
アルベリッヒ　とんでもありません。

殿下のお気に召すままというわけです。
わたしには少しばかりのおすそ分けを。

ギンター　貴族たちや、住民のあいだから、いつか非難の声が上がることはないかな？
アルベリッヒ　ご心配には及びません。

何しろ、彼らのお内儀や娘たちがお得意先ですからな。

あまりにゆき過ぎた場合には、殿下みずからが、ここぞとばかりに介入されて、範を示して見せるのです。

殿下のご威光が、きわだつこと間違いないです。

ギンター　（アルベリッヒを近寄らせて）よいか、物事を、あからさまに行ってはならぬぞ。

アルベリッヒ　承知しております。

ギンター　できる限り、ひっそりと目立たぬように。

万事は控えめに、自然とことが始まったようにな。

第四場

霧が深く立ち込める、警護隊の兵舎の近くの夜道。
フランツとクラウスの二人。

フランツ　後をつけてくるのはわかっている。

クラウス　誰だ？

やや、間があって。

道化　オイケン卿を知る者だ。

フランツ　オイケン卿を知っている者だと？

クラウス　われわれを誰だか知っているのか？

暗闇の中から声がして黒い影が現われる。

道化　（芝居じみた声で）知らずにことが済むものか。

クラウド その声は、道化の声だな？
フランチ そのようだ。いちど聞いたことがある。
近寄って顔を見せろ。

道化、近寄って、化粧をしていない素顔を見せる。

クラウド きさまが道化か？

フランチ それで、われわれに何の用がある？

しばらくのあいだ、三人の影が道の物陰に隠れて、何ごとか話し合っていたが、やがてそれも終わる。

深く降りてくる夜霧のなか、分かれ道のところで一人と、二人の人影が別れて次第に遠のく。

第五場

宮殿の賄いの召使いの部屋のカールと、その妻のマルタ。

マルタ、洗濯物をたたんでいる。

カール、手持ちぶさたなふうにそばにいる。

マルタ、話題を持ち出すようすで。

マルタ 今年は天候が不順で、小麦が不作でそのせいか、市場に出回る小麦の量が少なく、そのうえ質が悪くて、値段も高くなってきているわ。

わたしたちは、宮殿の賄いにあずかる身だから、直接かわることではないけれど。
カール 誰かが間に入って、賄賂を取ったり、仕組んだりの、悪さしているかも知れん。
マルタ そのうえ、バターに加えて塩までが値上がりしている。

やっぱり誰かが仕組んでやっているのかねえ？

カール やっているとしたらきつと、上質の小麦で作ったパンをたらふく喰っているやつにちがいない。

一人か二人か、何人か知らないが、そのうちの一人は多分……。

マルタ （口に指を押し当てて） おまえさん、めったなことを漏らすんじゃないよ。

カール （やや小声で） 一人は例の成りあがりもの。

もう一人は、身分のたいそう高い……。

第六場

以前のギウンターとアルベリッヒの話し合いから、かなり日が経っている。かつて、イザベルとコンラートが住んでいて、今はギウンターの物になっている広大な館の部屋。ギウンター、アルベリッヒが向かい合う。アルベリッヒ、変わらずぞんざいな口調。

ギウンター （くつろいだ口調で、アルベリッヒに） その方、近頃ずいぶんと羽振りがよさそうだな。

アルベリッヒ 殿下のおかげをもちまして。

恐れながら、殿下から少々おすそ分けを、頂戴いたしております。

ギウンター （アルベリッヒに身を寄せて） 例の件はうまくことが運んでいるようだな。アルベリッヒ 「免罪符」のことですか？

ギウンター そうだ。いったいどのように仕組んだのだ？

アルベリッヒ いえ、なに、何人かのドミニコ僧の傍へ寄って、誘いをかけてみただけのことですよ。すると溜池の樋を抜いた池水が、じわじわと静かにいつの間にか、そのくせアツという間に、田畑に広がったまでのことです。

ギウンター よいか、目立たぬようにな。

アルベリッヒ 心得ております。

何しろ、お墨付きの坊主たちがやっていることですから。

あまりのときには、殿下のご威光で、範を示されることですな。

ギウンター わかっておる。

だがしかし、そのほかにもいろいろと。

小麦や塩やら、何やかやといたしておるな？

アルベリッヒ 恐れ入ります。

ギウンター いたずらにおのれの才を頼んで、出過ぎた真似をしてはならぬぞ。

アルベリッヒ （神妙に） 承知いたしました。

ギウンター 何ごとにも目立たぬように。

その方が表に出てはならぬぞ。

アルベリッヒ 心得ております。

（しばらくして、部屋の中を見渡しながら） それにしても、ずいぶんの荒療治でございましたな。

ギウンター コンラートのことか？

アルベリッヒ さようで。

ギンター やつめは、おれに手をかけようとしやがった。

（部屋を見渡して）その報いがこれだ。

飾り付けや調度類も、没収のときのままにしてある。

やつめ、まったく豪勢な暮らしをしていたものだ。

アルベリッヒ その他にもいろいろと。

ギンター ヴァイスバッハのことか？

アルベリッヒ さようで。

ギンター 貴族たちを統率するために、やっていることだ。

それぞれが、監視し合うように仕向けて、密告をさせる。

やがてそれぞれが、疑心暗鬼と不安と混乱に耐えかねて、おれを頼ってくることになる。

アルベリッヒ 妙案です。

まことにもって、ギンター殿下ゆえにできることでありましょう。

ギンター そうかね。

おれよりもむしろ、そちの方が考え出しそうな気がするがね。

アルベリッヒ いえいえ、とてもわたしごとき者の及ぶところではございません。

レオンハルト殿の件については、ご存じのとおりでございます。

ギンター あれは、その方の仕業であろうが。

アルベリッヒ とんでもありません。

あえて言うなれば、あれは暴れ馬がしかしたことですよ。

馬が厩舎から逃げ出すことはよくあることです。

ギンター そうだな。

アルベリッヒ ええ、ええ、それにレオンハルト殿の、運が悪かったのでございましょう。

となると、強いて言うなれば、運命の女神たちの仕業というべきかも知れません。

ギンター （苦笑いをして）そうかも知れぬな。

アルベリッヒ それにしても、身边がだいぶスツキリしましたね。

ギンター オイケンのことか？

アルベリッヒ さようで。

ギンター あれは、その方が持ち込んできた仕事だ。

レオンハルトのことを、いろいろ探っているらしいとな。

それに、やつめ、いきなりやってきて、このおれに押しつけがましく意見など、無遠

慮にものを申しおった。

アルベリッヒ まったくです。

貴族議員たちに対しても、同じように振る舞うものですから、彼らに反感を持たれる

羽目におちいった。

ギウンター その方も、下心はともかく、二心を持つてはならぬぞ。

アルベリッヒ 勿論じゅうぶんに、承知しております。

これからは、誰にも煩わされることなく、殿下の思われるままにことが運びましよう。

ギウンター その方が、騒ぎを持ち込まぬ限りはな。

アルベリッヒ （話題を変えるように）それにしても、先日の馬上試合の殿下のご活躍には驚かされます。

会場中が鳴りどよめくたびに、殿下のご威光を目の当たりにするようでした。

殿下の巧みな槍さばきに、何人かは、あのようによぎまに。

ギウンター 鼻薬をかがせてある。

アルベリッヒ 鼻薬が効かない者には？

ギウンター 薬が効かないやつには、落馬したあとも容赦しない。

ここところの、見極めが大切だ。

できるだけ効果的に、残忍な場面をこしらえるのだ。

観衆を喜ばせるためにな。

見え透いた演出とわかっていても、やつらめ、大喜びだ。

アルベリッヒ それが、小麦にありつけないネズミたちや、一揆騒ぎを起こしそうな連中に対して、格好のガス抜きになる。

ギウンター だがな、その方が言うネズミたちに気をつけることだな。

群がって騒ぎ出すと面倒なことになるぞ。

アルベリッヒ 心得ました。

二人の話はまだ続く。

第七場

数日たった、離宮の部屋の中。

ギウンター、鎖帷子とマントを着たまま、ソファに腰掛けてうたた寝をしている。

しばらくして、目を覚ますと、部屋の片隅に黒い人影がうつむいて椅子に座っているのを見かけて驚く。

恐ろしさのあまり、体を動かそうとしても、金縛りにあったように動かせず

にいたが、やっと気を取り直して声をかける。

ギンター 顔を見せよ。

おれに何の用があつてきた？

人影、無言。

沈黙がつづく。

ギンター どうして黙っている？

ややあつて。

ギンター 何のために、そこにいる。

答えぬならそれでもよいが、早々にこの部屋から立ち去れ。

人影、応えるようにゆっくりと身を起こして、出口の扉のほうへ向かう。

ギンター、懸命に体を動かそうとして、目が覚める。

人影も消えている。

ギンター (身を起こして) 夢だったのか。

(間をおいて) いや、夢ではなさそうだぞ。

おれは確かに、うたた寝から一度は目覚めて、その時にあの黒い影が腰掛けているのを見かけたのだ。

そしてそれが出口から出ていくのを見たのだ。

そして、それからもういちど眠り込んだのだ。

きつとそうにちがいない。

それにしても、夢か幻か、あるいは生身の人間か、薄気味の悪いものを見たものだ。あれが、生身の人間でないとすれば、おれが自分で気づかないでいる、心の奥底深くにひそむ、黒い恐怖が形となって現れ出たか。

だがな、名にし負うギンターだ、何も恐れたり、案じたりすることはない。運命の女神たちに、付け込まれるような真似はよせ。

ギンター、なおも思案をつづけるところへ、マルタに案内されて、道化が訪れてくる。

ギンター （気を変えて機嫌よく）丁度よいところへ参った。

しばらくのあいだ、顔を見なかったようだが？

して、今日はまた何を仕込んだのだ？

道化 大風呂敷を広げても、包み切れないほどのお節介を。

いや、大ボラをでございます。

大きなホラより、小さなホラをと申します小さなホラほどの、大きなホラを。

ギンター 何のことだ、してその心は？

道化 大きなホラは誰にでも直ぐにバレますが、小さい方は、なかなかそのようにまいるませぬ。

ですが、うっかりしているうちに、とんだ目にあいまする。

ギンター ほかに何を持ち合わせておる？

道化 風呂敷取られて、尻を踏まれる。

ギンター 何だそれは。

してその心は？

道化 踏んだり蹴ったり。

走ったり、転んだり。

風呂を沸かしたり、風呂を立てたり。

ギンター 今日は、風呂敷だとか風呂ばかり。

無駄口はもうよせ。

いったい、大きなホラはどこへいった。

道化 風呂の中で尻をひる。

ホラ、このとおり、ボコボコ、あとはブツブツ。

やや、これは尾籠な。

尾籠と痔瘻は、尻のお話。これでお終いにいたしまする。

ギンター 無駄な話はやめろ。

こんどは、おれの謎かけだ。

（意味ありげに）おれが、まどろみから目を覚ますと、部屋の片隅に向かい合うようにして、黒い人の影のようなものがきている。な？

道化 （すらすらと）目が覚めたつもりがその実、夢がつづいているのです。

遠く離れたギリシャ神話に出てくる、オネイロスのやつが悪戯ですよ。

やつめは、昼間はどこかの果てにある洞窟の中なんかで、昼寝をしている眠りの神のヒュプノスのまわりを、むなしく揺らめいているが、辺りが夜ともなると、あちらこちらうろつきはじめるのです。

やつめの一族で、夢魔のインクブスめは、よく寝ている人の腹のうえに、馬乗りに

なって、人を苦しめます。

それで人がうなされて、目が覚めてみると、自分の手を胸の上に組んで、寝ていたと
いうだけなのです。

それで胸が圧迫されたんでしょな。

わたしなんぞも、ときどきそんな目にあいますよ。

なまじっか、神さまに手を組み合わせてお祈りをしたあげく、そのまま眠り込んで、
とんだ目にあうというわけですね。

ギョンター おれが、声をかけても黙ったままだ。

道化 声をかけたつもりが、実はそうではない。

たえ相手が答えたとしても、そのように聞こえた気がするだけです。

夢の中では、ことはまるで默劇のように進みます。

ギョンター 気がついてみると、消えている。

道化 虹も消えるが道理。

夢にせよ何にせよ、現われたものが、どうして消えないわけがありましたよ。

来たものが、どうして行ってしまうことがありません。

わたしの方も、そろそろ消え失せると、言われる前においとま、いや消えるといいたし
ましょう。

第八場

離宮を辞して、帰る夕暮れの道。

道化 夕暮れの人影は、長く大きく映るもの。

ギョンターめ、そのような影をみて自分を大物とっていやがる。

伝説の英雄、ジークフリートなどと。

夢の中で、黒い影など……。

どうやら、守護神も立ち退いたようだな。

貴様の命運も尽きたというものだ。

オイケン卿のかたきを取ってやるのだ。

以前にキリスト教徒の老人が、おれのために、十字を切りながら祈ってくれたことを
思い出した。

殿下のためにも言ったが、あれが暗示であろうとはな。

我が国の君主が、おまえである必要はないのだ。

猜疑心が強いのは、おまえが臆病で小心者だからだ。

（昂ぶりながら）執念深い復讐の女神エリーニュエスよ、立ち現れよ。
陰鬱な顔のブルートーよ、地獄の館の門を開けよ。

死神タナトスよ、その黒い衣をきて鎌をもて。

ジークフリートのような、無残な最期を用意するのだ。

（さらに昂ぶりながら）さあ、道化よ。

化粧の下、作り笑いはよせ。

道化の衣装を脱ぎ捨てろ。

化粧を落とせ。

（口元に指を立てて）おうっと、大声は禁物。

静かに、静かに。

舞台をまわす役目は終えた。

あとは、舞台の裏の方へひっそりと、裏の方へひっそりと。

第九場

ギンターとアルベリッヒが、コンラートの館で、話し合った日から何日か経った、離宮の一室。

ギンター一人、部屋の中を歩き回りながら。

ギンター アルベリッヒよ、やはりその方は、出過ぎた真似をしおったな。

何ごとも目立たぬようにと、申し付けておいたはずだが。

先ほど、その方の噂は、おれの網にかかって、そっこく耳に届いてきおった。

小麦や塩や、それにバターのことだ。

このまま放置していると、おれにもあらぬ疑いがかけられそうで、おれの身が危うくなる。

それに、陰険で狡知に長けたその方だ、おのれの都合で何をしゃべり出すか、わかったものではない。

何しろ、ニーベルングだからな。

民衆に呼ばれているのは、もちろんおれではなく、その方だ。
それでさっそく、手遅れにならぬうちに、手を打つことにした。

一揆騒ぎよりこのかた、何かと騒ぎたがる民衆に、その方をくれてやろう。

そのうえで、小麦や塩などの値段を元通りに戻してやれば、この件からおれの姿は、すっかり隠れおせるってわけだ。

だがこれには、ちょっとした仕掛けと工夫が必要だ。

アルベリツヒよ、さぞかし、ぎょうさんの町の衆たちから、怒りと憎しみを受けることになるだろうよ。

第十場

離宮の一室。

カールに案内されて、クラウスと鷹匠のミヒヤエルの二人、部屋に入る。

ミヒヤエル、鷹狩り用のブーツを抱えている。

ミヒヤエル 新調のブーツを、ことづかつて持参いたしました。
ギウンター それはありがたい。ご苦労だったな。

（クラウスを見やつて）きみも一緒とはおどろきだ。

クラウス わたくしどもは、鷹狩りのお供で旧知の間柄です。

ミヒヤエル わたくしが誘って同道いたしました。

ギウンター 結構だ。

（クラウスに向かつて）よくきてくれた。

ミヒヤエル 試し履きをなされますか？

ギウンター もちろんだ。

ギウンターが試し履きをしているあいだ、無言のまま、来客の二人、何やら意味ありげに顔を見合わす。

ミヒヤエル （履き終わるのを待つて）履き具合はいかがでしょう？

ギウンター うん、申し分なした、ピツタリだ。

ミヒヤエル それは、ようござりました。

ギウンター こたびは誰がこしらえた？

ミヒヤエル いつもご最員の、親方のマルティンでございます。

クラウス よくお似合いだ。さすがに新品だ。

いや、これはおかしなことを申し上げた。

ギウンター （機嫌よく笑いながら）なに、構うものか。

それよりも、せっかくだ。

久しぶりに、きみと一勝負とゆこうではないか？

クラウス そのつもりで参ったではありませんが、そういうことなら、ぜひにも。

ギウンター、召使いのカールに命じて、練習試合用の武具一式を持ってこさせて部屋の中かで試合を始める。

長剣から始まり、激しく打ち合ったすえに、辛うじてクラウドが勝つ。

短剣に持ち替えてしばらく互角に戦うが、バランス失ったクラウドに、覆いかぶさるようにして倒して、クラウドの喉元に短剣を突き付けたギウンターの顔が一瞬、にやついた、残忍な表情が浮かぶが、気を取り直して離れる。

試合が終わって、しばらく体を休めるのを待って。

ミヒヤエル 殿下、このたびの鷹狩りはいつ頃になさいますか？

鷹狩りに、ちょうどよい頃合いの季節になりました。

ギウンター そうだな、十日後ではどうだ？

ミヒヤエル 恐れながら、それでは鷹たちの体の調整が間に合いませんぬ。

急ぎ取り掛かりまして、二週間を目途に準備が整いましたら、お知らせいたしますが
いかがなものでございますか？

ギウンター よからう。

供の者たちには、そのように申し付けておこう。

ミヒヤエルとクラウド、一礼して退室。

第十一場

数日後のこと。

いつも宮殿の馬丁のところへ出入りしている博労のトーマスの、徒弟のルーカスが、アルベリツヒのもとにやってくる。

アルベリツヒ 何だ、親方のトーマスと一緒にじゃないのか？

ルーカス へい、旦那、きょうは親方と一緒にやねえんで。

何しろ、親方には、親方の都合でもんがおありなすんでね。

アルベリツヒ そりゃあ、親方の都合もあらうさ。勝手にするがいいさ。

あいにくと、おれはお城の馬の係じゃないんでね。

それで、おまえさんの都合は何なのだ？

ルーカス なに、都合ってもんほどのこともねえが、ちょいとこの近くまできたもんでね。

それに、懷具合が少々さびしいもんで。

（何やら意味ありげに）それに旦那、ちよいとしたうわさ話も御座んすぜ。

アルベリツヒ そうかね。それで例によって、お駄賃のおねだりか？

ルーカス おねだりなんかじゃねえや。

アルベリツヒ （冗談っぽく）じゃあこのおれを、ゆするつもりか。

ルーカス ゆするなんて、とんでもねえ。

何しろ、ちよいとした話を聞き込んだもんでね。

アルベリツヒ どんな話だ？

ルーカス 何ね、今の宰相のディートリツヒさんのことさ。

アルベリツヒ 宰相のディートリツヒがどうした？

ルーカス とくべつに、どうつていうこともねえが、（辺りを気にしながら）今時分、こんなところではね。

アルベリツヒ どうしようというんだ？

ルーカス 明日の朝早く、いまからおれの言うところへくれば、おれの連れの者が、何やかやと聞かせてくれますア。

ルーカス、アルベリツヒに近寄って、何やら小声で耳打ちをして聞かせる。

アルベリツヒ わかった。

ルーカス おれの連れの者つてえのは、大変な氣短の氣分屋でね。

ちよつとでも、くるのが遅かったり、約束ごとをちがえると、もうそれっきりつて野郎でね。

アルベリツヒ 承知した。

約束は守るから、そのつもりでいてくれ。

つづいて二人、何かのことで、そそくさとなにごとか打ち合わせをした後に別れる。

第十二場

明朝早くまだ薄暗いうちに、約束した町の通りの外れまでアルベリツヒがくと、いきなり得体の知れない数人の人影が現れて、有無を言わずアルベリツヒを捕らえて刺し殺し、なおそのうえ、頭部その他を石で打ちのめす。

陽の光が差し込める朝のうち、アルベリツヒの惨たらしい死体が、宮殿から離れた町の路上の片隅で発見される。
遺体は、胸を刃物で刺し殺されたうえに、辺りの足跡から見て、何人かからの恨みと思われる、石か何かの鈍器のような物より、執拗な暴行を加えられたことが知られる。

このことは、朝のうちに、たちまち町中に知れ渡る。

第十三場

その日の、午後の宮殿の部屋。

ギウンター、何やら思案顔で椅子から立って部屋の中を行き来しているうちしばらくして、呼び鈴を鳴らして、召使いのカールを呼び寄せる。

一礼をして現われたカールを立たせたまま、横目でみながら。

ギウンター （何かを思いついたふうに）その方の出自どこだ？

カール （おずおずと、しかし何かを探るように）はい、父親の話では先祖は、ここから遠く離れたニーダーラントのクサンテンと聞いております。

ギウンター ほほう、よくぞ申した。

クサンテンは、ニーベルンゲン伝説の英雄、ジークフリートが生まれたところだ。

カール 仰せのとおりでございます。

ギウンター （向き直って）あそこ辺りの森の中には、ジークフリートが、宝を守る竜を退治した洞窟があるはずだが、その方は何か聞いておらぬか？

カール 恐れながら、何も存じませぬ。

ギウンター それは残念だ。

カール 恐れ入ります。

ギウンター マルタはどこに出だ？

カール ザクセン州のゲツチンゲンの近くと聞いております。

ギウンター まちがえるな、ゲツチンゲンは、フランケン州であろう。

カール いえ、ゲツチンゲンはやはりザクセン州でございます。

ギウンター うむ、そうであったな。

ハルツ山地の近くだ。

年に一度のワルプルギスの夜に、魔女たちが集まるというブロッケン山がある。

カール よくご存知でいらっしやいます。

ギンター （からかい半分に） よもや、女房のマルタは魔女ではあるまいな？

カール （慌てて） 何を仰せられます、滅相もございません。

ギンター さようか。（笑ったその後、気を変えたように）

その方は、今朝のアルベリツヒの身に起こったのこと、知っておろうな？

カール （恐ろし気に） はい。

存じております。恐ろしいことでございます。

ギンター あれは、少しばかり才覚のあるやつだったが、小麦や塩のことで、おおぜいの町の連中から恨みを買って、そのために、みずから身を滅ぼしおった。

おれを扇動して、いや、たぶらかしてといった方が適切だが、いつの間にか自分でたいていような蓄財をしおった。

もつとも、その蓄財も没収されて、そっくりそのまま、おれの物になる。

おかげで、馬上試合での大判振る舞いや、大勢の供の者たちを引き連れて、鷹狩りができるといふわけだ。

（言い含めるように） よいか、アルベリツヒの二の舞を踏むなよ。

要らざることは、考えぬようにな。

いっさい、宮中で起こることは、見ざる聞かざる言わざるに限ることだ。

カールを下がらせたあと、部屋の中を歩き回りながら。

カールよ。その方は正直者のようだな。

ゲッチンゲンは、フランケン州と嘘を吹っかけてみたが、正直に否定しおった。

おれの仕掛けた意図を知らずにな。

あれは、その方を試してみたただけだ。

正直は、命取りになることに気をつけるがよい。

いつぞやのヘルマンは、拷問に掛からぬうちに、首謀者が誰か正直に白状し負った。

カールよ。その方はまた、小心者のようでもあるな。

マルタの話になると、慌てて否定しおった。

だがな、同じ小心者でもアルベリツヒのように、裏があつてはならぬぞ。

第十四場

ギンターたちの鷹狩りの日の朝。

離宮のテラスに、ギンターをはじめ、鷹狩りの一行が集まっている。

鷹狩りは、二組に分かれて行われる。
ギウンターの組には、二人の騎乗の貴族と、クラウドがお供をする。
もう一方には、三人の貴族に、それぞれの供の者たちがつく。

ギウンター （テラスから、周辺の景色を見ながら機嫌よく）久しぶりの鷹狩りだ。

目にする野っぱらや、まわりの山々が見事に色づいて、眩しいくらいだ。

ミヒヤエル まことに、よく色づきました。

ギウンター こたびの鷹はなんだ？

ミヒヤエル オオタカでございます。

ギウンター して、仕上がりはどうだ？

ミヒヤエル お待ちいただきましたおかげで、よく仕上がりました。

ギウンター うむ、オオタカであれば、獲物も大形のキツネを狙えるかも知れぬな。

ミヒヤエル はい、きつと仰せのとおりになりました。

鷹狩りは「王者の狩り」と申します。

このように、鷹狩りのお世話ができますことを、光栄に存じあげます。

クラウド 「王者の狩り」か。

なぜそのようにいうのだ？

ミヒヤエル ほかの狩猟にくらべて、高貴な身分の方々が特に好まれることと、加えてタカや、ハヤブサが高貴な鳥とされるからです。

クラウド 鷹狩りや狩猟で、この機会にこうして山野を駆け回って、騎馬の術を高めることができる。

アルノルト 山野や谷を駆け巡ることで、領内の地理を知って、領地の管理や防戦のために役立てることも肝要だ。

ギウンター （中庭の、馬や勢子たちのようす見下ろして）それでは、そろそろ中庭に集合して、準備が整い次第出立だ。

やがて、全ての準備が終わり、離宮の警備の者を残して、一行が城門を出ていくのを、カールたちが見送る。

第十五場

同じく、ギウンターたちの鷹狩りの日の朝。
貴族たちの館の廊下。

貴族たち、少しばかり苛立っている。

貴族1 このところ、またもや隣邦の動きが怪しいらしい。

貴族2 攻城戦用の大砲を取得するなど、軍備を強化しているらしい。

貴族3 何人かの、諜報の者たちが入ってきているとの噂だ。

貴族4 宰相のディートリッヒ閣下は、どの程度まで情報を持っているのだ？

貴族5 やはり常備の軍隊を持つべきではないのか？

警護隊だけでは余りにも心もとない。

その都度、傭兵を呼び寄せるには時間がかかりすぎる。

貴族1 かといって、常備軍を備えるほどの国力を、わが国は持たない。

貴族2 宰相は、外交手段に頼ろうとしているが、わが国の内情を相手に知られているのでは、効果のほどは期待できない。

貴族3 一国のあるじが、情勢をわきまえず、馬上試合にうつつを抜かし、そして今日は

また、大勢を引き連れての鷹狩りだ。

貴族4 英明な先君の、オットー公がおられたならばなあ。

第十六場

ギンターたちが、打ちそろって鷹狩りに出かけて、二時間ばかり経った昼近く、並々ならぬようすのアルノルトの早馬の二騎が、宮殿の宰相の元へ駆けつける。

アルノルト 大変です、閣下。

ギンター殿下が、狩りの途中、何者かに襲われて、お亡くなりになりました。

ディートリッヒ（驚いて）ギンター殿下がお亡くなりになったのだと？

何んとしたことだ。

（相手を急かして）いま少し詳しく話されよ。

アルノルト はい、われわれ一行が狩場の、広い草原と森が見渡せる場所に着いて、間もなく殿下は、先に立って、獲物を野原へ追い出すために、森のなか深くへ馬を乗り入れられたのです。

ディートリッヒ 貴殿もクラウスも、他の警護の者たちも、お側におらなかったのか？

話の途中に、騒ぎを聞きつけたホルスト、警護隊の指揮官ヴァルター、および連邦議会議長シュヴァルツほか書記官たちが集まる。

アルノルト 森の中に入って、しばらくの間は一緒でしたが、殿下はいつものように、われわれを遠ざけて、独りを楽しむかのように、犬を連れた勢子たちからも離れて、獲物を狩り出そうと、森の繁みの奥へ駆けていかれたのです。

ヴァルター それから？

アルノルト 殿下のお姿を探し求めながら、狩りを進めていたところ、やや離れた谷あいの方角から、突然、殿下の甲高い悲鳴が聞こえたので、わたしと、間近くにいたクラウスが急ぎ谷あいに駆けつけてみると、背中から槍を突き刺されたギュンター殿下が、落馬しておられたのです。

そばによって、わたしとクラウスが、呼びかけると、瀕死の殿下が、ひと言「ハーゲン……」と言いかけて息絶えられた。

シュヴァルツ うむ、「ハーゲン」と……。

ヴァルター 犯人の姿は？

アルノルト わたしどもが駆けつけた時には、すでに辺りには、まったく人の気配はしなかった。

ディートリッヒ 急ぎ、迎えの者たちと、犯人の探索の者たちを差し向けねばならんが、現場ではいま、どうしているのだ？

アルノルト クラウスと、他の貴族たちは殿下のお側に、警護の従者の何人かは、犯人の探索に当たっております。

話の途中、ディートリッヒ一人、席を立って、窓際まで進み、独り言のようにつぶやく。

ディートリッヒ うむ、最後の言葉に「ハーゲン」か……。

ニーベルンゲンの伝説、そのものようだな。

ディートリッヒ、再び協議を続けるために、席に向かいかける……。

—幕—